旧制高等学校記念館　第２１回　夏期教育セミナー

日付　　２０１６年8月２７日（土）
時間　　１４：００～１６：４０
場所　　あがたの森　　講堂

（遠藤）
定刻となりました。
　第 21 回夏期セミナーを開催せていただきます。私は開会式の進行を務めさせてだきます、旧制高等学校記念館の遠藤でございます。よろしくお願いいたします。初めに主催者であります松本市教育委員会を代表して、教育長の赤羽からご挨拶もうしあげます。

（赤羽）
　皆様こんにちは。教育長の赤羽郁夫でございます。第２１回夏期セミナーの開催にあたりまして、教育委員会を代表してひとことごあいさつを申し上げます。暦の上では立秋をむかえましたが、ここ信州でも連日、残暑が厳しい日が続いておりました。やっと昨夜来の雨で、すずしさがもどってまいりましてほっとしているところあります。このようななか全国からご参加をいただきました皆様にこころより歓迎と感謝を申しあげます。
　松本市は、皆様ご存じのように美しい自然環境にめぐまれまして松本城を中心に城下町として栄えた歴史や伝統文化を育んでまいりました。
　さらに松本市では三つのガクトとしても発展しています。そのひとつは本年より国民の休日として山の日 8 月 11 日でありましたけれども制定がされまして第１回の記念式典が皇太子ご一家をお迎えして上高地で開催をされました。
　そのうえで古くからの山岳観光都市としての岳都、そして現在開催されておりますセイジオザワ松本フェスティバルに代表される音楽の都楽都、そして我が国でも最も古い小学校のひとつとされる旧開智学校の開校、本日の会場にもなっております、この旧制松本高等学校の誘致など古くから教育を重んずる。そして文化芸術の息づく学びの都「学都」であります。
　松本市教育委員会といたしましても現在学び続けるまちガクト松本を目指し、
様々な取組をすすめておりますが、本セミナーの開催により、旧制高校の教育を見つめなおし、学びによるまちづくりの一層の前進に繋がることを期待しております。
　さて、今回のセミナーでは、瀬戸邦弘先生、堤ひろゆき先生、横尾朗大先生に応援団の歴史と現代と題してご講演・対談をいただき、応援団の変遷や意義について多角的なご意見を伺いたいと存じます。またこのあと深志高校応援団管理委員会も皆さんにもご参加いただき、応援活動の実演や、現在応援活動を行う立場としてのお話を伺います。
　さらに、明日の研究発表会では三羽光彦様による研究発表を皮切りに、
5 名の研究者の皆様に発表いただけると聞いております。講師、発表者の皆様には、たいへんお忙しいなかお引き受けをいただきましてこの場をお借りしまして厚く御礼もうしあげます。
　結びに、このセミナーの開催にあたりまして、旧制高等学校記念館友の会松村会長はじめ多くの皆様のご尽力をいただきましたことに感謝をいたしますとともに、有意義な二日間になりますようご祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。どうぞ二日間よろしくお願いいたします。

（遠藤）

ありがとうございました。続きまして同じく主催者であります旧制高等学校記念館友の会松村会長からごあいさつ申し上げます。

（松村）

こんにちは。わたし旧制高等学校友の会会長をしております松村好雄と申します。会長として二年目でありますが、この回には第２０回前からず～と皆勤して見ておって勉強させていただきました。当時この会は旧制高等学校の教育や文化をよく研究して知ると。そしてそれが今の教育にどう生かされているのか、あるいは生かそうとしてるのか、あるいは生かさなければならないのか。そう言う使命があったんじゃないかと思って、旧制高等学校の出身者や市民や学生や大学の研究者等含めて、そういう皆さん方の交流の場としてこの会を持ちました。

ところがその時はほんとに自由だったと思うんですが、いまちょっと心配になるのは文部省のほう今文部省とは言わないですが、文部省の動きがだんだんと締め付ける方向になって来てるじゃないかと思うんです。非常に、なまえはきれいなんですが、たとえば小学校、中学校の授業をアクテーブ・ランニングというたいへんわかりやすい。わかりやすいって言えばおかしいけど、子供達が主体的学ぶ。「そう言う方向でいろ」っていうことじゃないかと、いうことを中央教育審議会が言いました。それにしたがって今文部省のほうで一生懸命やっているようですが、確かに主体的に学ぶということはいいことなんですが、このアクテイブランニングの一番の問題点は問題を自分たちが発見するんじゃなくてある程度問題が決められておって､決められた問題についてやっていこうと、となれば、なにもアクティブじゃないんじゃないかと私は思って、心配してますが、そういう動きがですね。小中学校じゃないだんだんときて高等学校までいってですね。今日やるようにあるいは去年やったように、高等学校で、なんで文化祭の勉強するんだと、なんでそんな発表するんだと、あるいは今日やるようになんで今頃応援団の研究を発表するんだって言うことをですね。だんだんと自由という観点からとすると繋がれてきているんじゃないかと、そうならないためにもですね今日のこの研究会、あしたの研究会は非常におおきな意味をもつと私はそう考えております。

まあ幸い今日は皆さん方たくさんお集まりいただくことによって、だんだんと自由がせばめられていく中でそうじゃないよとほんとに昔の、昔と言ってはおかしいですけど、旧制高等学校の勉強というのはもっと自由があるのびのびと豊かであったと言うところを学んでいただければいいんじゃないかなと思っております。幸い今回はセミナーでは 3 人の先生。先ほど教育長さんからお話がありましたように応援団の歴史と現在と講演いただくことになっております。

わたしも体験談をしゃべれといわれましたけれども、わたしはちょうど昭和 20 年に旧制高等学校に入学しました。20 年に入学して、授業が始まったのは 6 月です。ましてや応援も応援団をやる雰囲気はなくって、他校との試合は一切ありませんでした。そしてあるならばあったならば射撃訓練の競争とか、あるいはいかにして軍隊行進というか、今北朝鮮がやっているような行進がありますね。あのすばらしい行進をやるかとのケースはあったにしてもいわゆるスポーツとか文明とかそういうことに対するケースはなんにもありませんでしたので、ついに応援は 1 回もした覚えはありません。うちのほうの学校の寮歌は応援団の応援歌がそっくり寮歌に代ってしまいました。

今、題で言えば逍遥歌。あるいは寮歌となっていますが、もとは応援歌だったと思います。その一番いい例が、たとえばその言葉の中に紅もゆる花ごろもというのがありますが、これは他校の赤い旗なんです。他校の赤い旗を紅もゆる花ごろもと言って、それはやがて沈んでいっちゃうとわが校のあれは治水に匂う白蓮の白、白はいつまでたっても匂って、強くて最後にがんばっているというそういう歌だったんですが、それは応援歌だったのが寮歌に代わっているということですが、そ

の辺今日３人の先生方がどのようにお考えになるかわかりませんが、楽しみになるんじゃないかと思います。いずれにしろ今日のこういう会がほんとに皆さん方の心に沁みこんで、あるいは松本市民に沁みこんで、そして若い力になって進んでいくことを祈念したいと思います。

今日にしても冨岡さんだったかな、冨岡さんとか谷本さんとかあるいは金澤さんとかこういう若い人達の発案によって講演会ができたことをうれしく思いますし、このちからを次の世代に引き継ぎ、そしてまた新しい力を生み出していけばいいんじゃないかと思います。その辺において皆さん方のお力を祈念してあいさつとします。よろしくお願いします。

会場から拍手

（遠藤）

ありがとうございました。

それでは講演に入る前に、本日お配りした資料をご確認下さい。

まず１枚目でございますが、ペラで１枚になっております旧制高等学校記念研究情報交換会８月２８日に参加される皆さんへ提出へのお願いという１枚､それから第２１回夏期教育セミナー冊子　１冊、堤先生の資料で、声援と応援の違い長野県中学校応援団組織化の目的という冊子がひとつ。

それから学校教育における応援団をめぐる考察ということで横尾先生の資料　以上４点がはいっているかと思いますが、もし足りないものがございましたらお近くの職員に方へお申し出下さい。

では、本日の日程についてご説明させていただきます。先ほどご覧いただきました第２１回夏期教育セミナーの表紙の裏をご覧ければといただければと思います。この後まる１のシンポジウムとなります。応援団の歴史と現在を、休息質疑を含めて 4 時 40 分頃までを予定しております。シンポジウムのあと 20 分ほど休息をいれましてご希望される方で 6 時まで懇親会を行いたいと思います。

会場はこのホール隣、前のほうになりますけれども第１会議室となります。本日の日程は以上となっております。続きまして諸連絡をさせていただきます。

お手洗いでございますけれどもこの建物をでていただきまして赤いレンガの旧制高等学校記念館の外のトイレ。あるいは記念館の中玄関をおはいりいただきましいて中のトイレをご利用いただければと思います。

なお記念館では､今１階ギャラリーで､バンカラ目線で松本歩きという企画展を行っております。この企画展示は無料でございますので､ぜひ合間をみていただいて､ご覧いただければと思います。また本日受付で先着順にお渡ししました紙の手提げ袋の中に松本市内の博物館で使える優待券などございますので、ぜひご活用いただければと思います。

これよりシンポジウムの準備をさせていただきますので、しばらくお待ち下さい。

それでは本日の司会をご紹介いたします。

旧制高等学校資料研究会で、当セミナーの世話人を務めていただいております。近畿大学の冨岡勝先生と、東京理科大学の金澤冬樹さんでございます。それではよろしくお願いいたします。

（冨岡）

失礼いたします。いまご紹介いただきました司会を務めます近畿大学の冨岡と東京理科大学で職員しております金澤と申します。よろしくお願いいたします。よろしくお願いいたします。

２１年目を迎えます今年の旧制高等学校記念館夏期教育セミナーでは応援団の歴史と現在という

テーマを取り上げることにいたしました。応援団というとガクランに学帽と高下駄のバンカラなどのイメージがあると思います。テレビ、映画、小説、まんがなどで描かれたり、先日の甲子園で決勝のありました高校野球での応援風景など皆さんにも馴染み深いことと思います。そんなイメージのある応援団ですが、そのあり方を歴史とともにふりかえる機会はこれまであまりなかったようにも思います。

そこで今回各分野の３人の専門家の先生をお呼びし、応援団を様々な視点から改めてみつめなおしてみようと、企画いたしました。3 人の講師の先生方には応援団を、それぞれ文化、歴史、教育実践などの側面から分析していただこうと思います。３人の講師の先生方をご紹介いたします。まず一番こちら側にいらっしゃいますのが、鳥取大学准教授の瀬戸邦弘先生です。そして上武大学助教の堤ひろゆき先生です。本郷学園中学、高校教諭の横尾朗大先生です。そして横尾先生の教え子で本郷学園中学・高等学校の応援団初代副将をされていました慶應義塾の学生でいらっしゃいます吉田駿也さんです。山田駿也さんでした。失礼いたしました。

また各先生のくわしいご経歴につきましては配布の資料をごらん下さい。

またこのあと特別ゲストとして松本深志高校応援団管理委員会の皆さんにご協力いただいて応援の実演、活動のご紹介をしていただこうと思います。

先生方すみません。どうぞおすわり下さい。

このシンポジウムでは３人の先生方に２０分から２５分間くらいずつくらいでご報告いただき、そして１０分間の休憩のあとに松本深志高校の皆さんに実演をしていただきます。そのあと講師、ゲストのなかでの意見交換。そしてフロアの皆さんへの討論という流れで進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。すわらせていただきます。

では最初にご報告いただくのはスポーツ、身体文化の研究を専門にされ、その一環として応援団の文化についてご研究されている瀬戸先生です。

瀬戸先生どうぞよろしくお願いします。ちょっとパソコンの準備などありますのでしばらくお待ち下さい。

よろしいでしょうか。それでは瀬戸先生どうぞよろしくお願いいたします。

(瀬戸)

それでは今ご紹介いただきました鳥取大学の瀬戸と申します。本日はよろしくお願いいたします。まず初めにですねこのような貴重な機会を頂戴いたしまして関係者の皆様に御礼もうしあげます。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

私はですね今いただきましたようにシンポジウムでこのお話をするようにということで、お話頂戴した時にどのようなパートかということで、お話・ご質問させていただいた時に導入と言うところと応援団という風にくくった時に、どう言ったものであるのかと概要と、これからお話いただくおふたりの先生につないでいくというような、落語でいう枕のところかと思いますので、ここはもりあがないと非常にまずいぞとプレッシャーも受けているかもと思っておりますが、しっかりですね、自分が研究している内容について、なるべくわかりやすくお伝えできればと思っております。時間が２５分と限られていますので、すこし矢継ぎ早にお話させていただくことになるかとしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

実はですね今回お招きいただいたきっかけとなったのが今金澤さんのお手元にあるかと思うんですけど、もう私がですね。近代日本の身体表象という本を、仲間と書きまして。ありがとうござい

ます。
　そのなかでですね、応援団の空間と身体ということについて研究の論考をまとめたというのが今回お招きいただいたきっかけであろうかと思っております。それについてすこしベースにしながら、概要についてお話したいと思っております。すこし文字が多いので、読もうとしないで私のお話内容を聞いていただければと思います。
　今回は私自身は東京６大学の応援団を中心に研究をさせていただいておりまして、最近は旧制中学、旧制高校の応援団のほうも主体的に研究をしておるところなんですけれども、実は私は応援団活動というところには、ここに赤で示させていただいたんですが応援団の文化というものが、存在しているのではないかという風に考えております。時に皆さんご存知のように時代錯誤であるとかまあそう言ったように揶揄されるんですけど、行動様式とか人間関係というのが守られる部分がありまして　一方でそこには現在失われつつある明治期からつながる学校の文化というものの重要なものが残っているんじゃないかという風に私は考えております。
　従って応援団を研究するということはすなわち我々がもう現在ひょっとしたら忘れかけている重要な部分においての学校の文化というものを見つけて、もう１回気がついて、それを継承するチャンスなのかなあ。と言う風に考えており研究をしているところでございます。お話しする応援団というのはどういうものか応援をする人はすなわちすべて応援団になってしまうのですけども、今回お話する応援団というは実は明治期に野球などが中心なんですけども観客はスポーツを観に行って、自制がきかなくなって大さわぎになってということがあった時にその場を盛り上げるのと同時に秩序ある応援空間を形成するための人達が必要になってきたと、その中で応援団というふうに組織化された人たちが登場するようになったと。それが今回お話する応援団だという風にご理解いただければと思います。ちょっと長く書かせていただきましたけれども申し訳ありません。

（冨岡）
　最初にお願いしておくべきことを忘れておりました。あの瀬戸先生の話の中で度々応援団の風景の写真などが出てきます。あの個人情報や又は、公開されていない写真が多いですので、あの基本的には興味深い写真が多いんですけれど、あの写真等撮らないように。またはそれをインターネット等で流さないようにお願いできないでしょうか。申し訳ありません。はい失礼いたしました。

（瀬戸）
　ありがとうございました。と言うことでどうぞよろしくお願いいたします。
　中断いただきましてかえって落ち着きました。ありがとうございます。
　いまお話ししかけていたところでしたが基本的に高校とか大学の教育機関において生徒だったり学生というものが自分の所属する学校のスポーツとか体育とか応援する場面で組織化された集団全体を呼ぶということになります。合わせてそれが、応援団とか応援部と言う風に言われた場合には、皆さんこちらのほうでバンカラの話をすること自体が意味がないことなのかもしれませんけども、バンカラ文化を色濃く継承する存在としても注目されていると言うのはご存じのとおりです。
　バンカラというのは、こちらに書かせていただきましたけれども、学生服とかマントを身に着けながら、そして長髪でと言うのが、外見的で特徴と今言われている部分でございますが、あわせてかれらがバンカラ文化というのが、外見だけではなくて、その外見とは関係なく物事をしっかり考えて真理を追及していこうと、そう言ったものがバンカラ文化だと言う風に言われております。
　したがって精神的なものを含めた行動様式全般、精神性が複合した文化というものがバンカラ文

化なのかもしれません。そうすると現在大学で伝統的と言われている応援団の人達は、これを追及している集団と言う風にも言えるのかなと考えております。早速出てきましたが、これは北海道大学の応援団の皆さんで昭和初期とかそうではなく、２０１６年の８月７日の現在の北海道大学の応援団の様子でありますが、いわゆるボロばかまというものを着て、ゲタをはいてこのまま北海道から来たというふうにおっしゃっておりました。このあと２週間このままで過ごすと、一切着替えはしないということを言っていましたが、それは単に荒唐無稽な行いをすることによって目立つとかそういうことでは一切なくて、自分たちがなにかを達成するためにそれが必要な要素であるということがそう言ったことが本来あって、そのために行われているものなのかなと理解することできるかと思います。

バンカラの空間という今お話ししましたけれども、そういったものを追及するということがひとつ応援団のアイデンティティだとすると、現在、今日の話の中に特に大学の応援団が中心的な部分になるかもしれませんけれども、例えば、袴とかガクランとか今、観ていただいたようにスタイルですね。それから自分達が必要とする所作というものを検収しながら、本来の信義の追及をしていると、精神的にも理想の団員になりうる・理想の応援ができる人間になりうるための活動をしているという風になるかと思います。そのために平素の演習や合宿などはですね。非常に昔ながらの厳しいものになった。それが時代錯誤だと言われることになるかもしれませんが、あわせて現代の学生たちの価値に、それが果たして適合するかと言った時にピッタリ適合するということはなかなかむずかしくなってきているところもありますので､形骸化された形だけ残ってしまう場合もあると、それが目についてしまう場合があるのかなといえるかもしれません。

応援団の伝説として３つの宝という言葉がありまして団旗と団長と校歌ということになるんですが、校歌のお話まですると今日３５分くらいになってしまうので、団旗と団長に注目して応援団の世界感についてすこしご紹介をしたいと思います。応援団において団旗というのはもっともまもられるべき象徴的な存在だと考えられております。これは６大学の写真でありますけれども、ひとつ象徴的な扱いとして団旗は地面にはつけてはいけない。例えば応援をしている時に団旗が掲げられているとき人はその下を絶対通ってはいけないとか。それから、場所によっては、素手で触っちゃいけないとか、いろいろな守られかた。それは荒唐無稽な特別にそれを守ることが守るべきということでは無く、意味がありまして応援団を象徴する形で団旗がいかに守られていて、団旗を守られるための所作が守られるべきだと、彼らの中で継承されている。言葉使いが難しいのですが、神格化と言う言葉が近いのかもしれません。彼らにとってみればそれぐらいの力をかけて守られるべき物と言うことになるのかも知れません。

これは早稲田の応援団旗ですが、これをしまう場合に団旗を守るために全ての集中を傾注していると言うことになります、例えばそのために旗士と言う存在・役割が重要になってきます。応援団の象徴となる団旗・校旗と言うのは、全学の誇りでも有りますのでしたがって旗士というのは応援団の中でも最も重要な役目の一つとなり、それから彼らがやりたい役目となります。旗士と言うのが花形と言われる所かも知れません。したがって掲揚中には絶対地面につけてはいけない、落としちゃいけないことにですけども、そういったことが実際にもし起きてしまったら、団から非常に、謹慎もしくは退部ということになったという伝説もありますので、それだけ彼らにとってみれば命を懸けて守らなければいけないような空間がそこで作られていると言うことになるわけです。

一方で団長という存在、団長という存在は団の中で一番偉くて、なにをやっても怒られないというか、まあそういったような形でみられる部分もあるんですけれども、実際に団長というのは応援団全体を体現している存在と言うふうに語られるようにところもあります。

私はですね、下のほうに書かせていただいたところなんですけど　応援団長というのは歌舞伎役者みたいな者なのかなあと考えておりまして、すなわちどういうことかというと一般の人が何代市川団十郎とかいうのを襲名して、その間団十郎とか襲名してなんですけれども団十郎を退いたと言うか、亡くなって次の人になったらその人が団十郎になっていくと。すなわちその人が偉いとかその人が特別だということではなくて団長という器を継承する人間がそこで役割をしっかり果たせるという事自体が重要な部分であって、すなわちその歴史とか誇りを受け継ぐために団長の体というのは器としてすべて受け止めるものなのかなと。そういう考え方も人類学的にはできるかなあと思っています。

ちょっと図示してみました。このまるが応援団の歴史だとするならばその上にですね。現在のこの小さな丸は、教示的な応援団の組織と言うことになります。例えば今年が５０年目だとしたら５０代の応援団の人たちがここで組織として存在していることになります。すなわち、彼らは実際に教示的な組織として現在役目を果たしていることになるんですけれども彼らが彼らの独自の考え方とかそれだけでなにかを動かすとかそういうことではなくて、重層的な歴史の上で一番上澄みのところで今までも亡くなっている方も含めてそのＯＢとかＯＧの人達の想いと言うのを、今実行するために実践するために存在している、存在というのは応援団というような枠組みなのかもしれないと思っております。それは後ほど体育会のお話も少し比較していただこうと思うんですが、枠組みの中でいうと、文化とか言うのは先人達の思いを受け継ぐという意味において存在しえるならば応援団というのは、まさにそのさえたるものとして、現在残っているのかな。これらの「ちゅうたい」として存在するため歴史的な縦軸と、教示的な横軸を繋ぐというのが応援団であり、応援団長がその中心にいるのかなという風に考えております。

例えばですね、先程申し上げたように中世の、ヨーロッパ中世の王の身体を研究する場合にですね、自然的な身体と政治的な身体とふたつの要素からなると言われております。自然的な身体というのは自分達が生まれて死んでいくまで、自分達の身体をなんですけれども政治的身体というのは申しあげたようにですねなにかの権威だったり、責任を受け止めてそれを次にバトンタッチするまでの存在いう風に考えていただければと思います。そうするとまさに応援団という枠組み。体育会もそうかもしれませんけれどもそこの中心にいる、すなわち王のような存在であり、それを受け止められるだけの人間がそこに核として存在して、それが次の人にうまくバトンタッチされていくということで、先人達の魂とか想いとか、それからたとえば文化とか伝統とかっていう言葉でよくそれは体現されると思うんですけれどもそう言ったものが運ばれていく。まあその命のバトンを受け継いでいくような存在なのかなと、まあそういう風に言えると思っております。団の枠というに残る精神とか魂というと､それとともに生きてその結果をだすことが常に求められるのが団長であり、応援団の人達でありその象徴としての団旗を守るという事が我々にとってみれば過度な形でみられるべき部分になるのかもしれませんけども、ひょっとしたらそういったバックグラウンドがあるのかなと、団長だけでなくすべての構成員は、その空間から空間を含む。過去からの空間を時系列、教示的に紡いでいく必要が求められると、そうすると例えばさきほども申し上げたバンカラ文化みたいなものと言うのは、その人構成要素として重要なポイントになるのかなあというふうにも思っ

ております。

　これはですね、東京６大学の人達が今卒業して５０年失礼しました。３０年くらい過ぎた方達がですね。ちょうど応援団にいた頃、応援団でやっていたトレーニングの図解トレーニング用語でいうのはちょっとおもしろいものがあったんでここにお見せいたしますが、電気いすというのは我々もなんとなくやったことがあるような記憶がするんですけれども抱っことか・コオロギとか・落としとか・ぞうとかですね今まで見たことないような特別なトレーニングを応援団ではしていたと、こんなことやってましたよ。今ひょっとしたらまだやっているかもしれないですけど、こういうのを見て、なつかしいなあと思う方も中にはいらっしゃるかもしれません。例えばこれが科学的なのかって言う風に申し上げますとひょっとしたら科学的ではないのかも知れないと、まずそれを申し上げておきたいというふう思えます。あとでまたもどります。それからたとえば応援団の人達が使う言葉というのがあります。応援団の使う言葉は国学院もありましたかね例えば応援団の典型的なあいさつで「こんにちわ」の意味「ちわ」ていう。たとえばそれから法政の場合には「押忍」「押忍」て、いうふうな言葉をつかったり、なにかをいただいた場合に「ごっつあんです」て、言ったり、あと立教の場合だと「失礼します」のことをだんだん代ってきて「せいやす」というふうにいったりする。それから「はい」の言葉なのに「いっ」ていう逆に聞こえるようなことを使ったりするわけですね。そうするとあ一応援団だなあって、外から見てると我々も思うのと同時にこれを技言語と言葉で考えられる部分でもあります。

　テクニカルタームのことを特別な用語の使いかたでもいうんですけれどもそこの人達がそこの人達だけで通じる言葉というのがあって、それを使いこなせることによってそれを使うことによって、共同体の一員として自分達がそこで成り立っていると言うことが確認されたりそれから以前にそこに属していた人達がそれをみることによって、自分達と同じ枠組みの中にいるひとなんだなあとことを確認したりすることができると、こういった言葉づかいというのもたぶんどこの応援団にもあるんじゃないかというふうにも思います。それからこれをちょっと表現がむずかしいところなんですけれども、例えば応援団の場合１年生は声がつぶれるくらいださせられることがあったりして、それから拍手を後ろでたたく１年生は後ろで拍子をとるために、こう叩く手を叩くんですけれども、その時にですね、これがどこの大学とはもうしあげませんけれども、ある大学では金属音がだせるまでやろうと、わたしこの話を聞いた時に金属音がでるのかというふうにびっくりしまして、そして資料をみながら思っていたんですけど、まあそうするとそこにはですね、例だと思いますがつばめがつぶれても継続したなんてこともちょっと書いたりしてちょっと大げさに書いてある部分もあると思うんですけど、実際にもう３０年以上卒業してすぎたＯＢの方にこの拍手が金属音がだせるまでって書いてあるんですけど、いったいどんな音なんですかというふうに伺ったことがあります。やってみましょうかって言ってくれてもうずっと拍手なんてやったことないはずなのに、１回パ〜ンて叩いていただいた時に「き〜〜ん」て音がしたんですね。これが金属音かという事を知らされたと同時に、１回身体化されたとものとはここまで残るんだとおどろいた経験があります。

　かならずしもこれで聞くといい例ではないし、これをやれっていうふうにぼくは一切もうしあげるつもりはないんですが、ただ自分の枠組みというのを自分で決めてしまった場合に、自分が成長できないひょっとしたらあるのかもしれない。その場合に自分をこえて、なにか課題を達成されてそれを一生懸命やった時に、それはつまり自分という枠組みを超えた時に達成される自分だったり身体だったりというものはある。それはおおげさなことではなく、たとえば学校にいって勉強するってことも同じで数学が苦手・英語が苦手って人もやりましょうって、勉強していく中で達成され

て文化かとか社会かといわれるようなプロセスって経験しているとするとするならば、ひょっとしたら応援団というものを身体とか感覚というのを形成するために、それを乗り越えることによって過去に我々がもっていた文化というものを、達成するためのプロセスというものを味わっているのかもしれない。と現代的には考えられるのかなと思います。

それからですね、応援団っていうものは考えるときに皆さんご存知のように応援団自体は競技に参加しませんのでいくら応援をしても別に勝つとか負けるかひょっとして関係ないというかいうふうに思うかもしれませんし、合理的に考えたらひょっとしたら関係ないんですね。なぜかといえばそこで試合に参加してないから。一方で、じゃあ応援団達はそれをどう考えるかということは関係ないんですね。私は黒子の人達のアイデンティティーのようなものなのかなあというふうに考えています。どういうことかって言うと自分達の努力や研さんいうのは決して競技結果に直結するものではないんですけれども　その道、自分達の存在が、実際にそこでがんばることによってなにかにつながっている自分達が応援することに依って、その勝利が引きつけられるということを、実際に自分達のなかで、位置づけられているとするならば、そのアイデンティティーていうのは自分達の中に向かっていくということになるんじゃないかと思います。

ちょっとくわしく説明いたしますと、例えばこれもどこの大学か申しあげませんけれども、おまえ。負けた後に１年生が呼ばれて、こういう風に言われたそうです。これ今ではありません。ずいぶん昔の話です。４年生がおまえたちの応援が悪くて負けた。これから球場１０周だって、外周を走らせられると、そうすると１年生達は、あれ４年生も応援していたのになあ～と思いながらも走るんですけども、実際には応援というのは別に直接的な勝負の因子には入ってないし、科学的な世界感の外にあるものだとしたらこれは意味がないと、理不尽だということになるかもしれないんですけれども、少し角度を変えてみた場合にですね。例えば、もし自分達の応援思いが届いて勝負が変わる。要するに声が届いて選手達ががんばれる。そこで勝負の空間が応援団というのが、いっしょに一生懸命応援したことによってなにか思いが通じて変化できたとするならば、自分達の力が少なく、足りなかったんだ。すなわちシャーマン的な役割として自分達気持ちが足りなかった思いが足りなかったんだとすると、そこには理屈がとおっているのかもしれない。４年生が１年生を走らせる理屈はないんですけども、自分達に向かって考えるという意味においてはそういうことなのかもしれない。すなわち我々が合理的、効率的に考えようとしている空間とか感覚の中で、応援団を直接見ようとした場合にはひょっとしたら見えない何か価値みたいなものもあるのかなと。そういうことも我々は考えていく必要があるのかな。そうすると、精神世界って言うのものが必ずしも、旧体前としているということで否定されるものばかりではなくて、そこの合理性とかそこの良さみたいなのを我々は考えたり、みる必要があるのかなあということを、思っております。

先ほど体育会の話をしましたけれども、我々の見ているスポーツというのはチャンピオンシップスポーツというものになります。合理性とか効率性というものを求めて非効率的なもの徹底的に、無くしていく合理性で追及する勝ってことが、スポーツ科学と言われるような物の枠組みの中で考えられるものなります。いっぽうで先程来、申し上げているように体育会という活動も、実はスポーツをやっているんで勝たなければいけないんですけども、体育会という部活はなになに高校の部活ということであるとするならば、今までの先輩達の思いみたいなものを背負って戦わなきゃいけないということになります。ここにいらっしゃる方達で体育会系で研究され、勉強され所属された方はよくあると思うんですけれども、なんでこんな不合理なことやらなきゃいけないんだと　思いながら自分が幹部になったらかえようと思って自分が幹部になった時、まったく同じことを後輩に

言ってるふうなことがよくある。よくあったりするんですけど、文化かとか社会科の中にですね、そこで行われているより一般的なひょっとしたら合理的じゃないと言われるような営みも、実はそこにおける合理性みたいなものをはらんでいて、そこのひと達をつくるためには重要な部分、すなわちそれがなくて勝っても意味がない言うふうによく言われるところとつながっていくのかなという風にも考えています。

ＯＢやＯＧ達のまなざしや伝統といわれる練習の方法とか所作などの共有があって体育会の人達は、そこで勝って初めて価値があるっていうふうにいわれるのは、ひょっとしたら応援団とつながるところかな～と思っています。応援団の活動というのは今申し上げた、勝たなきゃいけない、という自分達が効率的に戦わなきゃいけないところが、さきほどらい申し上げていますようにないので、そう言う意味はそうするとどんどんじぶん達のパフォーマンスって、いうものにおいてメンタル面を意識して自分達に、向き合う傾向があるのかなあ、そうすると必ず効率的にどうも清算されていくスポーツとは別で更新されることなき伝統的な価値っていうのが保護されていく部分があるのかな～というふうに思っております。

応援団という空間はそうやってアップデートしていく部分があるのかな～というふうに考えております。つまり過去と共存することが求められる世界というのが、応援団だったり体育会だとしますと、応援団ではですね、自分達の競技成績は当初から存在していないために、各部の勝利のためのパフォーマンス。その存在理由となります。そこでは特に効率とか合理性みたいなものを結びつかないで、精神的な鍛練その道を模索し現代的な　価値との接点が希薄な場合がみられるということとなります。そうすると「なんだ現代的じゃないじゃないか」つうことで、言われる場合もあるんですけれども、いや、違うんですと。すなわち彼らは、それを守ることによって、その彼らの存在域はしっかり発言できる、体現できるものとしての集団が存在しているとで、それは実際に我々が今、自分がみている合理性とか効率の世界じゃなくてもっと我々が先輩達からおそわってきたようなそんな時代。明治とか大正とか昭和初期とかそういう時にその人達がなにを大切にしていたとか、なにを求めていたのかいう精神性をものをいま我々に教えてくれる部分の一つのツールなのかもしれないというふうにもいえるのかなあと、いうふうに思っております。

ここで利害の利ということばを使わせていただきました。スポーツライターの藤島さんと言う方が早稲田スポーツを評して、こういう風におっしゃっていたんですけれども、例えば早稲田には、中村清という､瀬古利彦を育てた名将と言われる人がいて､それ以外にラグビーの大西鐵之祐とか、いろんな方がいるんですけど、例えば中村さんなんかは評される時、あの人はめちゃくちゃな人でねっ、とよく言われたりするんですね。どういうことかと言うと、例えば、君達が勝てるなら、僕はここの砂を食べるって言って、陸上競技場の砂を食べ始めたと、それから、自分、あなた達が俺が悪かったんだから俺が自分を殴る自分をどんどん殴り続けて血だらけになったりするとそういったところがクローズアップされるんですけれども、そうするとめちゃくちゃな人間だというなことでいわれるんですけれども、一方で中村清という人は当時のスポーツ科学の最新のデータすべて目を通していたというような人間としても評価されます。じゃ、それをしたっていいじゃないか。そっちにいったほうがいいんじゃないの。我々は普通に思ってしまうんですけども、ひょっとしたら早稲田大学という枠組の中で早稲田スポーツというものが結果を達成するために、もっとも合理的なものというのは、中村さんのやっていたやり方の中にあったのかもしれないともいえると言う風に考えるならば、それって合理性なのかなあというふうに僕は考えております。

最初の利害の利という字は、これは西洋でいうことわりです。すなわち合理的とか効率的どんどん効率的に考えればいいじゃないかっていうことわりの外に実は我々日本人というものがもってい

たことわりもあって、そのことわりを体現するために一見荒唐無稽なやり方とかありかたとかって言うものを我々はやることによって、そっちを達成できた時代があったのかもしれないし、そういう考え方も在るのかもしれないと、そう言ったところが研究の対象になるかなというふうに思っております。したがって応援団という枠組みはですね、向こうにずら～と、かかせていただいたんですけど、いま申し上げたことなんですけども、実際に自分達がですね。黒子として、そしてシャーマンとしてですね。そこでパフォーマンスをデモンストレーションをとのことばを使うと応援団の方に怒られる場合があるんですけれどもパフォーマンスに自分が、行えるべき、行うべきなんて言うか身体活動意味で聞いていただければいいんですけれども　そこで精一杯やることによって過去の人達と繋がりそして、いまの自分が今の教示的な空間とつながってそして将来にその想いが繋がって思いとか考え方とかを繋げていくということは、できるのかな～という風に思っております。

もうおわります。ハイ。

それで最後にひと言だけ実はですね。利害の利として応援団活動ということで実は学校文化として先ほどもうしあげたんですけど､わたしはいま旧制中学とか旧制高校とかいわれる系譜の高校に、全国的にこう回らさせていただいてまいりまして、これは盛岡一高ですけども、これは仙台一高ですけども実はですね、学校文化の中では応援という活動するってことが、実は旧制の學校にあって多くみられてですね。やりかたもけっこうだいたいいっしょなんですね。そこではですね、実は学校文化としてのオリジナリティを形成して、いわゆる地域の名門校、伝統校です。勉強だけしているわけじゃなくて部活も死ぬ程する。そして体育祭とか文化祭もわけわかんなくする。学校に泊まって準備するとかもうすべてにおいて全力で行う学校。そして地域の人達が認めている松本深志だったらとか縣が丘だったらとか諏訪清陵だったらといわれるところがあってそこは地域の誇りのだったりするんですね。そういうところには実は応援団が実践されている場合が多くて、実は学校の自分のアイデンティティを形成する。たとえば応援練習だったり、それから定期戦の野球を応援しにいったりとかそれから定期的な壮行会だったり、それから応援団活動であったり、自分が参加したり、そういったところでですね。自分のアイデンティティを形成するのと同時に学校のオリジナリティが調整されて、学校交換のみならず地域のアイデンティティや誇りの核として成立している場合というのがあります。すなわちぼくはここは重要な部分だと思うんですけれども、ぼくは無形文化だと思っています。無形文化財だと思っていて、いろんな考えかたとか意見とか必ずアップデートされてる社会の中にでてくるんですけれども、実はそれがあるからこそその学校というのはその学校をたらしめている由縁のひとつであると言うことが重要なポイントなのかなと思っています。

したがって無形文化財として、例えばおまつりといっしょです。これがあるからこそ深志生になる。これがある方こそ、縣が丘の学生になれる。それが誇り思って、みんなが成長していくからこそあの応援練習があったらこそ、３０年たっても４０年たっても校歌も応援歌も絶対忘れないんですね。でそのノスタルジーのなかでみんなが「あん時きつかったよな～」っていう想い出のほうがセピア色になった時、自分にやさしいんですね。それがバインドして後輩だったら「なんだがんばれよ」って言えるし、それから絶対言うんです。ＯＢの人。「俺らのほうがきつかった」って絶対言うんですね。そういうこと言いながら、みんな生活のできる空間がひょっとしたら幸せなのかな～というふうにも思っております。ひょっとしたら深志が丘生徒とか縣の学生とかはですね、自分達だけこんなことやってるんじゃないかと思っているかもしれないんですけど、例えばこれ仙台一高の　アピール行進、て言うんですけど、実はですねあのう二高との定期戦の前にあのう仙台の公園に集まって果たし状を読みあうんですね。「おまえらなどに負けるか」みたいな、今考えると教育的な校歌から考えたり、いろんなことから考えるとオイオイと言われるような部分かも知れないんで

すけれども、これもひとつの伝統文化として継承されています。
　そしてみんながアピール行進すると観に来て一高の子達がそれを歩いているとガンバレ～ていったり、そこで校歌を唄ったりするとみんな１年生は一高にはいれました。わたしは一高の一員です誇り思ってここで生活できます。ということを確認できたり、まわりは「がんばれ～」と言ったり、一高の人達はバンカラですけれどもひょっとしたら二高はこれ　こないだは女子の応援団長だったんですけれどもハイカラ部分だったり、そこでも「負けれないぞ」ってことで、バチバチ、バチバチやったりするんですね。ただライバル関係があって定期戦があっていう枠組みが残ってる町。それからそういったものが残っている旧制の学校が大切にされている街というのは、すばらしいまちですので、松本もすばらしいまちだなといつも思っております。決して「おべっか」ではないです。私が申し上げたいのは実際そういうところでございまして、これからおふたりの先生が実際に歴史的な変遷とそれからあのう実際に応援団として活動されて、それから教えられたというお話ございますので、わたしは幕をおろして、このくらいとさせていただきたいと思います。長くなりましてすみません。以上です。

ありがとうございました。　（会場から拍手）

　瀬戸先生ありがとうございました。瀬戸先生には応援団における空間や身体と言った独自の文化を分析していただきました。応援団をとらえるためいくつかの視点をご提供いただけたような気もしております。では続きまして堤先生にご報告をいただきます。旧制中学などの運動部、校友会活動についての教育史的研究をされている立場からお話いただきます。それから先ほど途中でお願いしてしまって申し訳ありませんでした。カメラの写真撮影やまたビデオ等は撮られたかたは外部に、特にインターネットなどに出さないということでご配慮いただけたらと思います。なお３番目の横尾先生のご発表の中でも動画がありますけど、そちらの動画の方は公開してもらってもかまわないというようなお話をいただいております。おまたせいたしました。堤先生よろしくお願いいたします。

　上武大学の堤と申します。よろしくお願いします。

　私は旧制中学校の校友会、特に運動部に関する研究をしているのですが、昨年もちょうどこのセミナーの二日目の研究発表会で松本深志高等学校の前身である松本中学校の野球について発表させていただきました。そうした縁もありまして、このたび応援団の歴史と現在というテーマでお声をかけていただいた経緯があります。貴重な機会をいただきまして誠にありがとうございます。わたしはスライドを使った報告ではありませんので、お手元の資料に則しながら報告させていただければと思っていますのでよろしくお願いいたします。

　まず、タイトルは声援と応援の違いということで少しお話しをさせていただければと考えているのですが、応援団の歴史と現在というテーマでいただいたのですけれども、わたし自身は運動部の研究をしてきましたが、応援団に所属したということはありませんので、なんとなくのイメージしかもってないというのが実際のところではありました。ですので、まずこのテーマをいただいて応援団を報告の対象としたときに、その「応援団」というのはなにものか、というところが私自身にとって最初の問いである、と考えました。応援団というものを最初に私のほうで設定してしまって、

過去の活動についてこれは応援団であるとか、これは応援団でないといった切り分け方をするということももちろんできたわけですが、歴史と現在というテーマで考えると、そのようなアプローチは少し違うのかなと考えました。ですので、その過去のどこかの時点で資料のなかで、応援団というものがでてくるとき、それはどのような意味でつかわれていたのか、どういった経緯で出来てきたのかということを考えてみることが、適当かと考えております。アプローチの方法としては、いつはじまってどこからどうやって伝播していったかという起源を考えるということも、やりようによってはあるわけですし、実際に応援団についていろいろな研究ですとか、あるいは歴史、部史とかいったものでは、起源といったものをしばしば語っています。そこで、どこが最初なのかというといろいろな説があるわけですが、基本的には旧制高校などはじめとして高等教育機関のなかで、明治２０年代ぐらいからおこってきたのではないかと言われています。

先ほど瀬戸先生もおっしゃっていたように、ひとつには、その応援という集まって声援を送っている人たちというのがいろんな問題を起こしたので、それを管理するという目的もあったという言われ方もなされています。非常に有名な例として一高の応援団というものがありまして、特に寄宿寮で編纂発行していた広陵誌の中に､端艇部が明治２３年４月に高商とボート競走で対戦した時に、声援隊というのができたことが述べられています。それをうけて昭和５９年、１９８０年代に入って書かれた『一高応援団史』という本の中では、これが組織的な応援団のはじまりだと言われています。

そう考えるとたしかに声援隊というのが応援団の起源のひとつである。ということも言えそうではあるわけですが、ただ実際に基になっている資料、端艇部部史を書いた人がどういう人なのか、いつの時代の人なのかというのをみてみると、大正２年に卒業した人が明治の末に書いていると考えられます。しかもその方ご自身が、但し書きというかちょっと断っているのが、唯一の資料である校友会雑誌自体にあまりくわしく載っていないし、書いてない時代の事についてはよくわからない。しかもその当時の人達からほとんど話が聞けてないので、自分が考えたことがけっこう書いてあるとわざわざ断ってくれている。その校友会自体ができたのが１８９０年の１０月ですし、記事の執筆者が資料にしているものも同年の１１月に発行されているわけですから、その端艇の競争、ボートの競争が行われた時に書かれているわけではないわけです。本人も選手とか応援者というものも、追憶しているという思い、後でこういう動きというのをみて応援しているのだと書いているであろうと考えられます。実際その１８９０年代に書かれたものをみてみるとほとんど応援という言葉が出てきてなくて、声援と言われている。声援をおくったとか、声援隊というのがあったという話はでてくるわけですが、応援とは特に言われてないということを考えると、声援をおくっていたことすなわち応援であると考えるのは少し注意する必要があるのではないかということを考えました。

ただ端艇部部史を書いた人自身が､「応援者が」と言っているわけなので、おそらく、明治の末に至る間に声援ではなくて、応援という言葉がでてきて、そこで定着していったのではないかと考えられます。それを受けて、今の私たちが、なんらかのスポーツのところで人が集まって、声をかけたり、旗を振ったり、という行動を応援と言っているというのはもちろん考えられる。今私たちがもっている応援という言葉のイメージですとか、そうした行動自体からさかのぼっていく方法はあえてとらないと考えています。どうやってそれは伝わっていったのか、あるいは伝わっていくということはもちろん誰かが受容しないと伝わっていかないわけで、受容する人たちはもちろんたくさんいるわけですので、ひとつひとつ全部辿っていくことはできません。そのように考えた時にむしろ、ある程度受容されてから１９１０年代以降後半にはおそらく応援というのが一般的になり、あ

るいは応援団という存在が受容されていったと考えられますので、その意味を、応援や応援団がどのように受容されていたのかということに注目して応援団のもつある種の機能をうきぼりにしていきたいと考えています。

旧制高等学校記念館にもかかわらず、なぜ中学校の話なのかということですが、基本的には中学生の時代を経て高校にはいっている人が圧倒的に多いということがまずひとつ。そして、講演会ですとか課外活動とか高等教育の中でいろいろできていったものが、中等教育に伝播していった、降りて行ったという事が言われています。ただ、そうであったとしても、実際はそっくり同じものができるわけではない。中等教育のなかでいろんなことを身につけた人が高等教育機関に進学して、また新しい文化を作っていく。ということで根っこの部分といいますか、中等教育に注目するというのが、ひとつ重要だと考えます。

その際に対象とするのは、長野県の松本中学校で、先にも触れた松本深志高等学校の前身である学校です。長野県尋常中学校の時代から本校としてあったわけですし、そのなかでひとりの、初代の校長先生というのは、３０年近く学校の中にいた。その中で、「自治」、「自治の精神」という言葉が重要視される。校風、気風といったものを非常に重視しているところがあります。それをみていくのが適切であるかなと思いましたので、松本中学校を取り上げます。今瀬戸先生の著作の中で書かれていますが、伝統を継承するとか伝統をいきる集団を受け継ごうというシステムであると応援団は考えられる。そう考えると、「自治」ですとかあるいは野球というのが非常に盛んだったのですが、それらの活動と関連付けてみるということは、適切だと考えております。

やはり、いきなり応援団の話に入る前に、応援団ができる前に一体どのようなことが行われていたのかを先にみていきたいのですが、配布資料３ページの１番、「「体育会」による応援」にある内容に入っていきたいと思います。松本中学校では、今で言う課外活動・部活動ですとかそういったものが、非常に盛んだったわけですが、校友会として組織されるのは比較的遅かった。大正に入ってから組織されるということになります。初代校長が亡くなったので校長が交代し、第２代の校長になって、校友会が設置されるわけですが、それまではいろんな生徒による団体が校内に存在していました。その中の一つに体育の活動というのを取りまとめている体育会という団体がありました。体育会の中の各部というのが、いろんな学校、師範学校ですとか、ほかの中学校といったものと対外試合・対校試合と言うのを行っていった。もちろん外部との試合が増えれば、声援をおくったり、いわゆる応援をする活動は盛んになっていきます。

声援を送る活動というのはどういう表現をされていたのかというと、「やじる」・「やじ」というふうな言い方でいわれていました。もちろんその対外試合だけではなくて、校内でのクラスマッチですとか、学校の中でいろいろ運動競技をする時にも「やじ」を飛ばすといいますか、やじって声援を送っていた。資料の引用部が基本的にはそのやじの考えの一例ではありますが、ここで「弥次党」という言い方や、４ページのところで従来の無敵団というようなものを組織したというような言い方で、いろいろなことが行われていた。ただその中で、３ページの引用文の二つ目のところですが、これはその野球部の生徒が書いている文章では、その声援に対して、「選手候補諸君は犠牲の値を深く了してやってくれた、背後には真摯熱烈なる校友六百の応援がある」と言っています。おそらく「やじ」と応援は行動として別のものであったということは考えられないので、おそらく同じ様な行動について、やっているほうとしては、「やじ」と言っているわけですが、競技をしながら受ける方としては応援だと言葉で表現しています。

ただそういうやじる人と競技している人だけではなくて、みている人ももちろん登場し、群衆という表現が使われることがあります。このときには、なんらかの団体を組織したりして、声援をお

くって観戦するということが主な目的であったと言える。観戦にでかけて旗をふったり、声をかけたり、歌をうたったりといったことを実際にやっている人たちは、それを応援とは言ってなかった。ただ野球部は学校を代表して試合に出ていると自分たちでも考えているわけですので、「やじ」とは言わずに応援という言い方をしていることがあります。初代の小林校長は野球が好きだったということで、松本中学校では野球が非常に盛んであったと言われております。ただ先ほどもでてきましたが、第２代の校長は、はからずしもそうではなかった。１９１４年に校長が交代して第２代になった時に長野県内においても野球害毒論争というのが全国的に新聞紙上などで行われていたわけですが、それの影響を受けて聯合運動会が中止となります。第２代の本荘校長先生というのは野球にも否定的であったようで、野球部の選手制度を廃止しました。選手制度というのは、生徒の中からあなた野球部の選手ですと任命して対外試合等にむけて準備をして出場していくという制度なわけですが、特定の人が、そういう運動に関する資源、グラウンドや道具といったものを占有するとまではいえないにしても、かなり優先的に使えるというような制度です。

ただそういう制度が１９１５年度には一旦廃止されて、校内での野球は野球部が変わらず管轄するけれども、対外試合に選手を出すことは廃止になりました。第２代目の本荘校長先生というのは、それまでの生徒がやってきた組織というものを変えて校友会を作って、学校長の管理のもとに置こうとしました。小林校長とはかなり方針が違うので、それまでの卒業生や在校生の中から本荘校長を別な校長にかえてほしいということが運動としておこるくらいに関係が悪化していたことがあります。小林校長の時代には、小林校長が実際に校内にいて、なにかを認めたりとか、それはだめだといった判断をしていたわけですが、もういなくなってしまったわけですので、小林校長が認めていた「自治の精神」ですとか野球といったものが生徒としては否定されたと受け止められた。そのなかで、野球部というのは、よかった校風、すなわち「自治」というものを松中の野球部が作っていたのだと考える。そういう主張するということになります。野球は職業的ではなくて、精神的なものである。というようなことを言っています。

この校友会雑誌が発行された１９１７年、本荘校長が病気といいますか体の都合ということで退職します。そうするとその次の年４月に入って選手が復活し、野球部が再び対外試合にでるようになります。「意気の生活、感激の高潮、是れ吾人の最もあこがるゝ所、而して吾人は其の最高機関たるや実に野球部にあり」と言っていて、校風はもちろん本荘校長になった時に変わってしまった。すたれていったと言われていたわけですので、そのなかで野球部を中心に校風といったものを再び盛り立てていこうというようなことになっていきます。応援のことで考えますと野球競技というのは全廃になったわけではないわけですが、一番力を発揮されるような対外試合というものがまずなくなり、復活したということです。

やじとか声援という形であるいは野球部からみれば応援という形で、いろいろな場面で活動していた人たちも実は体育会の中でいろいろ組織されて活動していたけれども、それも校友会という組織が作られることによって一元化されてしまう。そういう形で応援というものが変わっていったのですが、野球部はそのなかでも「熱狂せる校友は大旗小旗振しつつ盛んなる応援を与えしも意気遂に技に勝ち難く」ということで応援自体は受けつつも負けてしまったと言っています。繰り返すようですが、本荘校長というのと小林校長というのはかなり路線が違っていたわけですので、しかもそれまであった「自治」といわれるような校風といったものを認めてくれる人というのは、いなくなってしまっているわけですので、「自治」といった校風は、生徒たちが意識しながら生徒たちで作っていかなければいけない状況になりました。その時に野球と他の生徒とのかかわりが新しくつくられるということになっていったと言えます。

野球部が復活したのは１９１８年で、１９２３年のときには、野球部は非常に活躍していた。その時に応援団も新しく組織されたといわれています。これは先ほどの言ったことでもありますが、おそらくそのとき南北信での対立が野球を中心にして燃え上がったようなことがありましたので、応援活動というのもコントロールすることが求められていた。そうしたことも背景としてはあると思います。ただ、非常にがんばっている野球部に対して応援をするような組織といものが１９２３年には作られている。１９２４年には競技成績が悪かったようで、野球部興廃問題というようなことで、野球部なんてなくしてしまったほうがいいのではないかという問題が生徒の中からだされることになります。そうした状況のなかでもその７年くらいまえに言われていた「意気の生活、感激の高潮それは吾々若人の最もあこがるゝところである。しかしてその最高機関たるや実に吾が野球部ではなかろうか」というかつて雑誌にのっていた言葉とほとんど同じような言葉がでてきています。その期間野球部というのは松本中学校の精神的なものの最高機関であるというふうに自分自身を位置付けていて、その野球部をやじとか声援ではなくて「応援」する存在が「応援団」と名づけられて組織化されたと言えます。もちろんこうした傾向、自分たち野球部というものは精神的なものの最高機関であってそれによって学校を盛り立てていというのが松本中学校に限った話ではありません。もちろん他校でもあるわけですが、松本中学校に限っていうならば、精神的な校友である松本中学校の生徒全員がもっていなければならない「自治の精神」などの言葉で言われることを盛り立てていくは野球である。ただ野球部選手に生徒全員がなれるわけではありませんので、そのうえで選手と校友を繋ぐのが応援であると言えます。

やじとの違いと言えるのは、選手と同じ心になって戦うってことが目的とされている、ということです。応援団というのはそういう意味では全生徒に対して野球によってうみだされる精神的なものを繋げていかないといけないわけですので、生徒による組織よって任命されていた。そのなかでもいくつか問題が発生したので、様々な改革というのもなされていく。資料の７ページ上の方に引用しています。またはその応援団自体が野球と生徒というものを繋ぐ役割を担っていると思っていた。さらに、応援活動という自体を生徒がやらなくてもいいのではないか、やりたい人がやればいいのであって、全員がやる必要はないのではないかと応援の免除を願い出た生徒に対して、他の校友・生徒が怒って彼を退学にするべきであるという問題というか事件が発生しました。実際この彼は退学したわけですが、この事件をきっかけに選手と応援団あるいは生徒が応援に参加すること自体が意識されて、「ますます校友は自覚してきた」と、「自覚」が進んでいきます。野球と応援と「自治」や精神的なものというのは、必然的な繋がりというのはないわけですが、その「自治」があるから応援していると言っているけれども実際には応援という活動を通して「自治」なり精神的なものを全校友は持っていなければならないということが現れてきます。特に応援を通して学校の精神をもっていることを示さねばならない、表現されなければならないのだという事が、かなり進行していきます。そうしたもの、「自治」とか、意気と言われるものがない生徒というのは、校友ではないと退学をせまられていって退学していくと言う流れになっていった。そういう形で制度化された応援というものを通じて意気ですとか、あらゆる精神と言ったものを表現していくことがより「自覚」されるというようなことになっていきます。

それに対して今度は運動部の方も今回負けたのは応援が悪かったからじゃないか、応援によって表現されるような、生徒の中の意気が足りなかったから負けたのではないかと言いだします。応援団としても、こちらが悪いのではないということで反論し、非常に微妙な仲になっていきます。運動部に対しては勝ってくれないと校友のもっているはずの意気というものが示せない。生徒に対しては、もっとがんばって応援することを求める。以上のことを考えてみますと応援というのはひと

つあるもの、校友の共同体と言ってもいいと思うのですが、コミュニティーとしての校友を作っていくときに非常に重要な装置になっていったのではないか。なぜ重要かというと、結果が明確に出てくるような運動競技というものと、声援などのそれぞれは関係をもたないような行動、とを繋いでいく役割を持っていった。しかもそれ勝つか負けるかと言うのは、運動競技の選手の力いかんによるわけですけども、その勝つか負けるかということを支えているのは、校友のもっている精神性、精神的なものであり、それは、応援によって表現される。運動競技で勝てば校友の精神的なものというのが熱く表現もされて、校友の精神性に支えられて野球部の選手としては勝つわけです。負けた場合には生徒の意気とか精神的なものというのが足りないからである。そうすると、表現されるべき意気が足りないのでもっとがんばって応援しろということにつながっていったと言えるかと思います。その上で言えることは、自分の帰属する団体の代表者にたいして応援をしているわけですが、それによって基本的にほとんどの生徒は応援に参加して、卒業したあとも、自分たちの中学校の同窓生であるとか、先輩である後輩であるという形で校風共同体というものを維持してきたことも事実としてある。自分たちが校友共同体に帰属していることを再確認するとともに、応援という行動を通して、スポーツというものと自分たちを結び付けていく点で重要である。そういう役割が応援団にはあったのではないかと考えられる。というところで、わたしの報告を終わりたいと思います。

（　会場拍手　）

（冨岡）

堤先生ありがとうございました。堤先生のお話にでてきました旧制松本中学というのはみなさんごぞんじのように、このあと休憩後に応援実演をやっていただく松本深志高校の前身校ということになります。いまのおはなしと現在の深志高校の応援団がどのように繋がっているのか、または変わっているのか、興味があるところですね。ありがとうございました。

それでは続きまして最後に本郷学園中学・高校教諭で生徒のみなさんとおなじで応援団を立ち上げられた横尾朗大先生に教育現場、教育実践の側面を中心にご報告いただきたいと　思います。ではよろしくお願いいたします。

（横尾）

こんにちは。横尾と申します。本日はこのような貴重な機会に誠にありがとうございます。私の方からは応援団というものを、プロフィールにも書かせていただきましたけれども、大学４年間経験し、また、現在中学生・高校生・大学生の応援団員の指導にあたっているという観点からですね経験者・指導者という立場から、実践、教育実践。実践をするという方向性で応援団をみていきたいなあというふうに思います。

まず最初なんですけども、私が何者かという事もあると思うので、応援団と私の関わり、自分の話になってしまいますが、お話ししたいと思います。私の出身校がですね。神奈川県の横浜市にある桐蔭学園というところです。中高６年間おりました。ちょうどその頃は硬式野球部が強い時代で、私が在籍しておりました６年間でいわゆる甲子園大会に４回出場してるんですね。中１の選抜、中２の時の選抜、高校１年生の夏の選手権大会、高校３年生の夏の選手権大会と。ちなみに高校２年のときはご存知の方もいらっしゃると思いますが、私の１学年上の世代に、横浜高校の松坂大輔がおりましたので　神奈川の予選会では当たることもありまして、メタメタにやられるということで、

高校２年生の時は、完全に横浜高校にやられてしまってはいたんですけれども、高校３年生の時は、最終的にはベスト８まで進んで神奈川の県大会の決勝と甲子園大会の１回戦から３回戦、３回戦で当時優勝した桐生第一高等学校だったんですけども当時３回の応援に行きました。
その時に感じたのが、今の生徒を見ていても思うんですけれども、いわゆる高校生、思春期というか、あの頃に持ちがちな感覚、いわゆる「俺こんな高校来たくなかったよ」みたいな「母校なんかくそだ」みたいな言い方をする子ってのは、けっこういて。そういうふうに自分を否定的にとらえる。学校そのものを否定的にとらえることが、かっこいいじゃないですけど、そういうのを、何て言うんでしょうかね。私自身もそれがあったんですけど。っていうのを感じられて、私も例外なく「桐蔭くそ」とずっと言っていた。甲子園大会のアルプススタンドの応援というのは本当にすごいんですよね、熱気が。横浜スタジアムもそうなんですけど甲子園のアルプススタンドは比べ物にならないくらいすごくて「Ｔ・Ｏ・Ｉ・Ｎ桐蔭」とか一緒にやるわけですよね。そしたらふと「桐蔭入ってよかった」と思ったんですよね、その時。多分母校愛を感じたのかなあというふうに思えます。直接的に大学に影響したかどうかわからないんですけども、ちょっと一種の感動、感銘を受けて。大学のときには國學院大學に進学して全學應援團というところにですね、「歌と踊りのサークル」だって言われて勧誘を受けて入りました、うそではなかったですけど（笑）。一応、國學院大學の場合だと応援団が学生自治組織にいわゆる体育会とか運動会の傘下ではなくて、同格の組織としてあるので。紆余曲折の歴史があったみたいですけれども。なので、正直存在感がすごくある。応援団長になればやっぱり大学の職員さん教授や先生からも一目置かれるということで、大学生になったからには１番になりたいなあという気持ちがありましたんで、応援団で頑張ろうと。入った時には団長になりたいと思って一生懸命やりました。で、私の前にお二方の先生がお話になりました、いろいろな報告があったと思うんですが、応援団の雰囲気というのを何となく皆さんお聞きになったと思いますけれども、もうその通りです。（大学生の時は）本当にいっぱいいろいろありすぎたんで、話したいことはいっぱいありますけれども、おそらく話すと日が暮れてしまうので、大学の応援団ってどういうものか、よく言われる言説をですね、言葉をいくつかピックアップしました。
まずは「勝ったら野球部のおかげ、負けたら応援団のせい」。みんなそういう感覚でやっています。それから「団長が雨だと言ったら晴れてても傘を差せ」。あとこれ有名なんですけど、「１年生はゴミ・２年生は奴隷・３年生は普通の人・４年生は神様」という完全なる縦社会を表現する言葉なんですよね。おそらく応援団をかじった人はそうだなあと、思っていただけると思うんですけど。とにかく一言で言えば過激な活動がずっと続いて、このままやっていたら無事生還できないんじゃないかなみたいなふうに感じることが４年間で３回くらいあったんですけれども、ご興味があれば後ほど時間があればお話しできればなあと思うんですけれども、そんな経験を経て４年生になった時に団長を拝命しました。
　で、経験をして応援団を卒業してから思うことは、やっぱり年上の方と接する機会が非常にあったなと。ＯＢの方がいっぱいいらっしゃるので、私は５２代なんで、５１代（分）の先輩方がいらっしゃるわけです。なので大学生で普通に生活してたらお話しする機会がないような年上の先輩、けっこう本気で応援団やってた人って、社会に出ても本気なんで、お話ができたことは当時は正直いやだなと思うことあったんですけれども、あれは財産だな、と社会に出てから非常に感じました。あとは人前で何かやることが非常に多かったので，自信は確実についたなというふうに思います。そんな形で、私と応援団の関係ということでお話をさせていただきました。続きまして教育現場において応援団がどういうふうにやってるかというお話をしたいと思います。
　お手元に（本郷の）学校案内を配らせていただいたんですけど、この白い冊子なんですが、私が

勤務している本郷中学校・高等学校は東京都豊島区にあります。中高一貫の男子校なんですが、進学校と言われる学校で、これが全てではないんですけど、一応指標として２５ページを開いていただけると、昨年度の合格実績でいろいろ載っています。マスコミにも取り上げられる東京大学は昨年度１１人一応合格を出すということで、一応進学校として頭のいい生徒多いなと思っていつも仕事に邁進しているつもりなんですけれども。ちなみですけど本校の近くに同じような中高一貫の男子校と挙げるとするならば、３５年間連続東大合格者日本一の開成中学・高等学校というのがあります。いつか勝てるかなと信じているんですが、ちなみに本校１１人の東大合格者に対して昨年度の開成は１７１人だそうです。この差はどれくらい縮まるのかなと　思いながら、あと勤務していきたいと思います。(笑)

ちなみに私本郷に来る前は女子高に勤務していたんですが、自分自身が中高一貫の男子校にいて大学は４年間応援団やってずーっと男社会にいたものなので、社会人１年目は工業高校これも男子高だったんですけども。そしたら（２年目に）急にふっと女子高に行ったもんですから、何だかもう分からない世界で、ちょっと合わないなあという感じで、まあ、いろいろありながら本郷に縁があって来たという経緯です。

学校案内の１２ページをお開き下さい。１２ページの右下に部活動の一覧があるんですけど、委員会が載っております。右下の上から２番目に応援委員会というのが掲載されております。載っているということなんで､学校公認の団体として､委員会なんですが応援委員会というのがあります。こちらは昔からあったというわけではなくて、まだできて全然経ってなくておりません。５，６年くらいしか経っておりません。立ち位置としては部活動じゃなくて委員会なんですね。平成２４年に作ったけど５年経っています。こちらの立ち上げに至る話を後ほどしたいんですが、その応援委員会今日の応援委員会としての活動を紹介させていただくとするならば、いろいろあるんですが、主なものとしては部活動の応援。特に野球部とかですね。それから受験を控えた高校３年生への壮行会などもやっておりますし。文化祭での演技披露パフォーマンスですね。それから最近では先日のリオのオリンピックにも出てました吉田沙保里選手を応援したり、あとは本高校のＯＢでもある北島康介選手の壮行会なども行っています。ただ、この応援委員会の出自が体育祭をきっかけにしてるんですね。なのでその体育祭の動画を用意したのでこちらをご覧いただければと思います。

動画上映あり　場内消灯
電気を点けていただいてよろしいでしょうか

とういうような形で本校では応援団活動、応援委員会なんですけれども、かなり充実した活動ができているなと私感じておりますが、最初からそうだったわけではありません。今度もう一つの資料みなさんお出し下さい。１０枚綴りの資料です。２ページ目にですね。Ａとかかれているところがあるんですが、傍線部のところ　ぱっと読ましていただきます。「当時生徒会長を務めていた岸君と生徒会指導委員会で体育祭担当をされていた北村教諭から体育祭で応援合戦がしたいという話をいただいたことが始まりでした」。そして下の傍線部分。「せっかく興味を持ってくれた応援団に対して抵抗を感じてほしくなかった」。本郷にきた１年目に応援団が昔あったらしいんですけど、それが本校にはなくなってしまったので復活させたい、という生徒会の発案から私が指導すると。外見を教えるという形ですかね、ということをやったんですけど、実はまったく同じようなことが、本郷に来る前の、先ほども申し上げました女子高でもありまして、応援団を作りたいと。「先生応援団やっていたんでしょ」「おしえて」ということなんですけど、だいたいそれって、見た目だけを模し

たい。私応援団がっつりやってた人間から言わせてもらえば、「だけ」なんですよね。

やはり応援団というのは、母校愛であるとか、使命感であるとか、選手を勝たせたい、という一途な気持ちとか、そういうものの発揚としてやるもんなんですけど、当時ちょうど、今でもそうなのかな、氣志團という応援団チックなミュージシャンが出ていて。嫌いではないんですが、むしろ好きなんですが（笑）。「氣志團みたいなことがやりたい」ということだったんです。「応援団って、そうじゃないんだよ」と思いながらも、今読ませていただいたとおり、応援団を興味を持ってくれたから抵抗を感じてほしくないなあということで、私の中ではある程度割り切って教えていたんですね。ただ、だんだんそれをやっていくにつれて、男子校だからなのかわからないですけど、志を持った熱い生徒達がだんだん集まってきて。これ、ひょっとしたらいい応援団作れるんじゃないかなと、私自身４年間やってきて、（応援団の活動が）いかに過激かをよく知ってますんで、これを中学高校の教育に用いるには厳しいんじゃないと思っていたんですけれども、なかなか生徒達が、気骨のあるやつが集まってきて、決定的に感じたのはですね、平成２３年。応援委員会を発足する前の年１１月に、私ごとなんですが、結婚式を挙げまして、その時の披露宴に生徒達が駆けつけたんですね。そこで、いろんなパフォーマンスを、応援団チックではないんですが、パフォーマンスをやった時に、こんな人前でこんなことができるこいつらだったらすごいいい応援団できるんじゃないかというふうに感じたところから動き出し、平成２４年４月７日に発足する形に至った。

応援委員会発足させるため、なぜ発足させなければいけないのかというのが、２ページの右側Ｂの下線にかかれている所なので、ちょっと、ここ、話をしたかったんですが、読んでいただければおわかりになると思いますのでお読みいただければと思います。そういう経緯を経て、今のような本郷学園応援委員会という充実した活動ができていると思うんですが、ただ応援委員会を発足したばかりの頃は、やはり新しいものは常に叩かれますので、いろいろ苦労もありました。私自身（当時の生徒たちから）聞いていることもあるんですが、ちょうどせっかく今隣にですね。初代副将の、先ほど言った志の高い気骨のある。もっと言うと、人の結婚式に来て、好き放題やっていった生徒のうちの一人（笑）なので、彼にやってみてどうだったかという話をちょっとしていただきたいと思います。

（山田）

私現在慶應義塾大学２年、おととし本郷高等学校を卒業しました山田駿也と申します。自分自身本郷のほうに中学高校あわせて６年間すごしたわけなんですけど、そのうちのほとんど大部分をなんらかの形で応援団に携わって過ごしてきました。自分が中学３年生の時に応援委員会を設立するということで、準備期間から携わらせていただき、高校１年次の４月に本郷学園応援委員会を設立しました。高校３年生の７月に第２代の幹部に無事引き渡し現在第３代幹部でなんとかやってくれているみたいです。

試行錯誤した、苦労した点などもあるんですけども応援団をやるにあたって練習がつらいとかそういったもので、悩んだことは自分自身ほとんどありませんでした。と言うのも、やっぱりわかった上で設立当初から携わっているので、その点に関しては割り切って死ぬ気でやって来たつもりです。しかし辛かったことは何度かありまして、やっぱりその、１番は生徒と自分たちのとのギャップというか、気持ちの違いというものがありました。自分も同じ生徒だったんですけど、競技大会というものがうちの学校にありまして、中学高校に分かれてクラス対抗で競い合うというものなんですけど、そこの最後のイベントで、先生対生徒の代表でドッジボールを行うというイベントで、われわれは生徒のほうにくっついて応援して先生をやっつけてやろうという気持ちで、みんな体操

着の中ガクランをきて、はちまきまいて旗を持ってでかけたところ僕らのことを一瞥して皆さん競技のほうに夢中。そんな中でもめげずに応援はしてたんですけど、挙句の果てには「応援うるさいからだまってて」ということで、そんな時期もあり、なかなか最初のほうは受け入れてもらえなかったのが、自分的にはとてもつらかったです。

そこで感じたのが同じ生徒でも、応援団というものに心酔というか、やろうと思ってしまった自分と普通の生徒の間ではやっぱりすごく気持ちのギャップがあるんだなと感じました。もうひとつさっき動画でもあったんですが、白組の団長というものを　副将とは別にやっていまして、その団長のほうは中学１年から高校３年まで全員が、体育祭の一・二か月くらい前から練習を始めて、体育祭で披露するというものなんですけれども、ここもかなり苦労しましてやっぱりみんながみんな応援団をやりたいわけではなく、むしろこういうのをやりたいとはいってくる生徒はほんとに少なかったです。そのなかで練習していくにあたってほとんど監督とかもぼくらに丸投げなんで、自分達だけで練習日程をきめて、練習場所をきめて、ひともあつめて出席もとってやっていくと、やっぱり応援団なんかやりたくないとか、俺はいかないとかいう生徒がいっぱいいたんですけど、そこはもう自分達と生徒の間に気持ち的にギャップがあると言うことは重々わかっておりますので、でもそのなかで応援をやるなかで、さっき達成感というものをあげたんですけど、絶対やってよかったと思わせる自信が高校３年の僕にはありましたので、なんとか必死につなぎとめて、つらくても一生懸命応援をやっていこうというのを、いろいろこう中学生、結構生意気な高校生にいうのが非常にたいへんでした。

つらかったこととか試行錯誤したことばかりだったですけれども、自分自身中学まではあまりなにごとにも一生懸命になれない性格でして、高校で応援団をやることになって、ほんとにきつかったんですけど、やっていくなかで、主体的というんですか丸投げされたっていうか自分達でなにかをやって、自分達でなにかをかえていかなければいけないというきもちをもって人前で一生懸命やってきたので、僕にとっての本郷中学高等学校での生活は応援団なしには語れないなと思っております。それがいま大学２年ですけれども、いまは応援団はやっていないですけど自分の中で自信になっています。以上で終わらさせていただきます。

会場から拍手

（横尾）

はい。と言うお話でしたが、丸投げ丸投げと言っておりますが、主体性・自主性を育てたいとの目的のもとになにかあったら対応できるように、抑えるところはもちろん抑えております。丸投げに彼には見えたところがちょっと残念ではありましたけれども。（笑）

続きまして、すみません。８ページをお開きいただいてよろしいでしょうか、ここから自分の大学４年間の経験であるとか、教育現場で指導していた結果、応援団って何を伝えることができるのかなとか、いわゆる教育実践における応援団の存在意義とか、今後どう在るべきかということを私なりに考えている、感じていることをお話しして終わりにしたいなと思います。

さきほどの堤先生のご発表にもありましたけれども、おそらくこの応援団のルーツ・起源と考えられるものは、いわゆる一校のボートレースのことなのかなと私も同意見です。ご紹介もありましたが、やじとか、相手をこう、なんていうんですかね、圧倒するような声援で、ひるませて勝利をもぎとる。非常に合理的といえば合理的なのかなというふうに思います。現代の応援団のやり方から考えると、ただ応援団というとエール交換があるとか、模範的生徒でなくてはいけないとか、そ

ういうのがおそらくどこの高校大学の応援団でもあると思うんですよね。そうするとどうやら一高の頃とずいぶん様相がかわってきたなと思うんですが、おそらくそういうかたちをつくりあげてきたのが、影響力が１番あるという意味でも早稲田・慶應の早慶戦がやはり大きかったのではないかなというふうに思います。

８ページの上のところに写真が載っているんですけれども、これ慶應義塾の応援指導部、応援部かな。応援指導部のかつての団長ということなんですが、棒を持っております。この棒を大学（当局）からですね、渡されて、塾長から渡されているということは、やはり野球場で、早慶戦で観客がいっぱいいる前で指揮をとる権限を大学から委託されているということになるんですね。なので、いまでも早稲田大学では、早慶戦に限らず校歌を歌う時に指揮棒もって、こういう動き（動きを実演）、テクというふうに言うんですけども、するという光景があります。私がお話ししたいのは、応援団というのは、オリジナリティーとか独自性とか結構こだわる団体なんですけど、そうすると学校それぞれによっていろんな演技、パフォーマンスの形があります。突きをするところもあれば、こう円を描くような動きもあればと。なので、それぞれいろいろ違うんですが、いくつか見ていくなかで、だいたい共通する動きというのがあるんですね。

一つが拍手。拍手をするということです。あとは。これは基本的に「ウケ」とかいろんな言い方あるんですけど、後輩がやる動きで(動きを実演)。花形となる前に立つセンターリーダーと言われる人の動きで、これもいろいろある中で、だいたいどこの学校もやっている動きがこういう動き(動きを実演)。「ニ拍」という言い方をしたり、学校によって呼び方が違うんですけども。あるんですね。これって一体なんなんだろうというのを僕が考えたんですけれども、おそらくこうじゃないかと思うんですよね。さっき指揮棒となるものを渡されて、たくさんの観客で、みんなでいっしょに校歌唄うぞ。慶應だったら塾歌歌うぞという時に「いち、にー。いち、にーと」とこう拍子をとる（動きを実演）。そうすると横のほうの観客から見れば、こういうふう（動きを実演）に見えるわけですから見やすい。ですけれども、正面の上段から見るとこう見えてしまう（動きを実演）ので分かりづらい。「分かりづらいぞ」というようなことがあったから「いち、にー。いち、にー。いち、にー。いち、にー。」(動きを実演)になったらしいんです。という説が有力なのかなあと私自身が思うんですよね。そうすると、この動き（動きを実演）というのは、遠くからも見やすい。そしてどこにいても見やすいと非常に合理的な背景があるというのを分かってやるのと、応援団って、こんな感じだよねというふうにやるのとでは全然違うわけです。

（遠くから見やすいという意味で）大きく動かした方がいいわけで、でもそうした背景を知らないと、何か速さだけ競う、こんなわけになったりするわけですよね（動きを実演）。そうすると小さい動きになって見づらい。本来の目的を見失ってしまう。ちなみに「早くやれ」というのも、これも合理的でピタッと止めないとそこで拍手が揃わないですよ。こう流してる（動きを実演）とパチン（揃わない拍手の音）だと揃わない。「パチン」（動きを実演）ってやれば拍手が揃って音が合うということは、応援が効果的になるということなのかなというふうに思うんですよね。というような例を、いくつか挙げたいなと思います。また早慶の話になってしまうのですが、こう手を前にクロスさせる動きというのは結構あります、クロスするんで、（山田に対して）折角、（慶應義)塾生がいるんで立って下さい。(慶應)義塾ではどうクロスするんですか？（山田が動きを実演）何でこうかってお分かりになる方いらっしゃいますか？どうぞ！（会場から発言あり録音では聞き取れない）そうです。その通り。

９ページを見ていただきたいんですが、（山田に対して）まだいて。９ページを見ていただきたいんですけど、慶應義塾のペンマークといわれるものが、手前にあるのが、同じ形になるわけですね。

ですから彼（山田）は絶対逆にはしない。ちなみに早稲田はこっち（動きを実演）なんです。つまり慶應じゃないぞと言っています。こういうのを知っているか知らないかでは大きいと私は思っています。それから次の例ですけど、折角なんで本郷学園応援委員会本郷中学校高等学校の校歌の動き、うちは「リーダー」と言うんですけど、最初のとこだけちょっとやってみたい。

歌（わ～れ～ら～）　動きを披露　会場から拍手

（山田は）今は引退しちゃって全然下手なんですけど（笑）。この動きは、今ご説明した通り２拍なんです。で、それ以外でちょっと違う動きが入っていたと思うんです。（山田に対して）そこだけやってもらっていい？「１＾２＾３＾４＾５」これも正に荒唐無稽な動きではなくて、ちゃんと理由があるんですけど、ノーヒントで分かる方いらっしゃいます？あ、工藤（本郷の生徒）はだめだよ。うちの生徒が（会場に）いるんで。知ってるんで。はい。じゃあ、説明させていただきます。とこれは簡単にいうと本郷学園の「本」の字を表現しているんです。（動きを実演）これが一画目。で２画目。これが３画目こうはいって最後にこれが半分がこう。というつもりなんですね。１２３４５なので、すべての動きに意味がある。ということを追及させたいなと。ちなみに応援委員会を立ち上げる時に、どういう動きにしようか、彼らといろいろ話し合あったんですけど、どの学校どの高校・大学の応援団にも必ずその形の理由というのがあるはずなんです。なので、それを知ってやっぱり活動に邁進してほしい。

特に応援団という団体は先輩が絶対なので、「お前こういうもんなんだよ」というふうに言われると、「そうだ」になっちゃうんですよね。これは僕の経験もあるんですけど、大きな団旗をいれる団箱を（複数人で）球場に運ぶときに、（伝統として）足の運び方があったらしいです。でもこれを合理的に考えて、（全員の足の動きを）一緒の動きをしたほうが、団箱の揺れがちょうど一緒になって負担が減るというのを、私１年前に開発して、これすごくいいいよね、いいよね、とやってたら先輩に怒られたんですよ。「それ違うぞ」と。それが２年経ったら「一緒に足を揃えるのが伝統だ。（少なくとも）１０年前からの伝統だ。」みたいなことを言われて、いつの間にかに伝統になってるんですよ。という、根拠のないようなものがあるということなんですね。

（山田へ）ありがとう。戻って下さい。ということで最後に私がまとめて申し上げたいことは、理由とか意義とか意味とか全てちゃんと分からせたいということなんです。本当にどんな理由でもいいのかなと思います。たとえば本郷も（腕を）クロスする動きがあるですが、慶應と一緒なんですよ。これは何なのかと言うとさっきの９ページのペンマークの下に載せましたけど、わが校のライバルは開成なんで。僕が勝手に思ってるんですけども（笑）。開成のペン剣のマークがこっちなんですよね。開成じゃあないぞ。打倒開成みたいなつもりでやってる。そんな理由でいいのかというのもあるのかもしれないんですが、でもこれってそうだからと理由も説明されずに言われるよりも、そういう意味があるんだな、の方がよい。応援団の活動というのは、一般の方にはなかなか理解しずらいところがあります。

生徒たちもやっているときに、僕はこういうふうにやっているんだ。この動きはこういう理由があるんだと説明できないより、できたほうが意味があるわけで、もっと言えば、本人が分からなければ一般の人は分からないわけですから、そういうところの理由を、あの応援団活動でいろいろ教えていければなという風に感じて、教育活動をしているつもりです。

これからの応援団に必要だと思う事ということで、１番最後なんですが、５ページです。すみません。ちょっと戻るんです。（資料を）ご覧下さい。いくつか割愛してしまっているんですが、Ｆのところです。５ページの右側「ひとつひとつの作法を検証して、応援の理論を構築することを、建学の精神や教育理念と照らし合わせて、母校の発展に寄与し得るかどうかを心がけながら新しい応

援方法を模索し、実践していくこと。それから他校とのネットワークを構築し、互いに尊重しあう」。これが僕は大事かなと。最初の２つは今説明したとおりなんですが、３つ目は、じつは応援団というのは部活動でも結構あるんですけど、部活動だったら普通にある全国的なネットワーク・協会とか連盟というのは応援団にはないんです。一部やってらっしゃるところもあるんですが、少なくとも全国規模というのはないんですね。なので、こういうような形が、いろんな情報交換とかできるような機会が、僕は必要だなと常々考えていて、その一環ではないんですが、これで、すみません。９ページにまたいくんです。

９ページの右側に掲載させていただきましたが、本校の近くにある学校、ここも中高一貫の男子校なんですが、城北高校さん、城北中学・高校さんとは提携こういう形で結んで本城戦、城本戦など、こういう形でやっています。東京都の高校ではいわゆるこういう動きをするような応援団はあんまりないんですよね。あとは早稲田実業と（明大）明治くらいなんです。そういうことも大事だな～と思いますし、全国的にみれば山梨県であるとか、それから静岡県さん。これ、先日お招きいただいたんですが、静岡県の高校の応援団の方々は応援団フェステバルというのをかなり大規模でやっていて、そこに呼んでいただいた。これすごく貴重な経験だったなと思うので、これが全国的に伝播していき、全国連絡　協議会ができればいいのかなというふうに考えております。

生徒は応援団を通してなにを学べるか。いろいろ挙げられると思うんですけど、彼（山田）のさっきの話にもあったんですが、結局これなのかなと　思います。１番最後です。１０ページをご覧下さい。こちらは初代の応援委員会の幹部が引退するときの交代式、平成２６年７月２１日にあったんですが、そのときにむけた文章ですが　へんな顔してるんですが、初代主将の増本が言葉を残している「本郷という学校を好きになれたこと」。母校愛を感じることができるのが応援団といっても過言ではないじゃないのかなと私は思います。これがひいては自信になる。自分のバックボーンになる。自信になるんじゃないかなと私は思います。
以上で終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

会場から拍手

（金澤）
それでは、定刻となりましたのでシンポジウムを再開したいと思います。

私セミナーで世話人をしております、東京理科大学の職員しております金澤と申します。後半の司会をいたします。よろしくお願いいたします。今回はシンポジウムのあとということで、特別ゲストとして、先ほど堤先生のご発表にもありました旧制松本中学の後身校であります長野県の名門として知られます松本深志高校の応援団の皆さん。正式名称が松本深志高校応援団管理委員会というらしいんですが、こちらの皆さんに応援の実演をしていただくということで今回スペシャルゲストという形でご了承いただきました。

撮影についてなんですけど撮影はかまわないんですが、さきほどと同じ様に公表インターネット等への公表はひかえていただくということで、学生さん生徒さんもかなり頑張っておられますので、その辺はご配慮いただければと思います。実演中なんですけど、私もあまりよく聞いたことはないんですが、かなり音がでるそうなので、びっくりされないようにあらかじめこころの準備をしていただければと思います。今回は松本深志高校の応援団の皆さんが野球の試合の時の応援の一連の流れを披露していただくことになりますので、よろしくお願いします。それでは皆さんよろしくお願いいたします。

松本深志高校応援団のみなさんありがとうございました。もうすこし盛大な拍手をよろしくお願いいたします。　　{会場から拍手}
興奮さめやらぬと思うんですけこれからどシンポジウム・討論等にはいっていきますので、少々準備いたしますので、少々おまち下さい。

ではこのあとシンポジウムに入る前に副団長お二人に残っていただきすこし紹介がてらですね、ご質問インタビューをさせてというと変ですけどご質問させていただいて、そのあとに講師のみなさんとの討論にはいっていこうかなと思っています。前のほうでお願いします。まず自己紹介をしていただいてもよろしいですか。オウカンのしろはちの副団をやらせていただいてる「うさみ」です。あかはち副団の「中村」です。
先ほどいま一連の動きをしていただいたんですけどこれは野球の一連の動きという形でよろしいでしょうか？
本番はもうすこし長かったり、今回変えたところも大くありますが、だいたいはそのようにやらせていただいています。
非常に勇壮で選手の皆さんも勢いつくと思うんですけど、ここで少し皆さんのことを聞きたいですけれども、そもそも応援団管理委員会というのは、どういった組織で日頃どういった活動しているかを簡単にお話下さい。
応援団管理委員会は応援団を管理する委員会なので野球応援なので応援団管理委員会がでて言って、そのうしろに応援団以外の人たち深志生がいて、それを統率する役目です。私たちは具体的には春に新入生に歌を教え込んだりとか、合格発表で新入生の合格を祝ったりとか、オリエンテーションで学校の説明をしたりとか、深志生の面倒をみる係というか、なんかそういう位置づけで動いております。
ありがとうございます。試合以外でも活動されているということで、お聞きしたんですけど、そもそも新入生のみなさんというのはどういう経緯で応援団管理委員会の方に入ったりされるんですかね。
毎年４月に春の歌練があるんですが、その後に他の部活とかから、お時間をいただいて、オウカンを選出させていただいてそこできまったオウカンが３年までずっと続けていく形で決まっています。
ありがとうございました。選出が行なわれるということで。せっかくなのでお二人いらっしゃるので、どうして応援団に入ろうとおもったか個人的な思いをお話いただければと思うんですけど。
わたしはもともと応援団管理委員会に入る気はまったくなかったんですけど
そもそも吹奏楽部に入る気で深志高校に入ったのですが、なにか新しいことを初めてみたいと思って、春の歌練４日間うけてオウカンに興味を惹かれてわたしもその立場になれたらなと、はいりました。
わたしは深志にはいるまでオウカンという存在も知らずにうたれんでようやく知ったというか感じだったのですが、選出で話を聞いているとけっこう先輩・後輩、上下関係があってわたしは中学校の頃そういう部活には、はいっていなかったのでそういう部分にもあこがれがあって、高校では厳しい部活に入りたいと思っていたのですが、深志にしかないというところにひかれてオウカンに入ることをきめました。

ハイ。貴重なお話ありがとうございます。非常に熱意が感じられるような話だったと　思います。最後に皆さんいるひとにでてきていただいて、服装はかなり独創的なものをきてられるんですけど、はたのようなものもたれているんですが、こういったものは代々受け継がれたものなのかという道具とか服装についてお聞きしたいんでよろしいですか？
いま着ていたマントは受け継がれているものであって、団長とか副団の服装とか全部上からひきつがれてきたもので、自分で用意するのはガクランぐらいです。
ありがとうございます。このあと講師のみなさんと討論にはいりたいと思いますので、講師の皆さん上の方に出てきていただきまして、団長のお二人そちらの席のほうで

それではみなさん発表の方ありがとうございました。このあと講師のみなさんと応援団管理委員会の副団のおふたりに登場していただきまして２０分程度の討論を行いたいと思います。講師の皆さんでお互いの意見であるとか松本深志応援団のみなさんになにかご質問あれば、ぜひ、なにかだしていただけないでしょうか。　いかがでしょうか。
どなたからでもだいじょうぶですから。では瀬戸先生　順番に　はい
折角なんで深志のみなさんにお話し伺えればと思うんですけど、いまオウカンの選出の話があったんですけど深志では基本的にはじゃあ全校の生徒のみなさんが応援団で応援団が管理されるその管理する皆さん指導する立場ということで大丈夫ですかね。その際に実際毎年やっていて大変なこととかやりがいとかって、実際やってみて副団長になってみてあったら教えていただきたい。何かありますか？

春の歌練とかで教えていくと、初日はオウカンのことを知らない状態ではいってくるので指導し甲斐がありますね。深志の伝統応援がしみ込んでいって、春の歌練を乗り越えていった１年が深志生として認められる風潮とかがあるので、その４日目になるとやってよかったと思いますね。
応援練習が春に４日間すぐ入学してあって、ご自身たちもそれを通過してきたじゃないですか。深志の学生になったと思うのは応援練習が終わった後というのはみんな思ってますがね。さっき先生の発表聞いてなかったと思うんですけど、松本中学に途中から転校してきた学生が応援することは意味ないんじゃない長谷川なにがし事件、ただ学校に入学するだけじゃなくて深志の一員になっていくうえで応援歌おぼえたり校歌おぼえたりみんなとひとつになる場所として応援練習って重要だと思うんですけどそちらの副団長はいかがでしょうか。
そうですね。歌練４日間みていたのですが、日に日にすがすがしくなっていきます。いい顔になっていくというか。うれしい気持ちになっていくので、やっぱり必要なものであると思っています。

ありがとうございます。堤さんいかがでしょうか。
熱演をありがとうございました。応援を管理される応援団を管理するお仕事だと思うんですが、どのくらい管理するのか、どこまで管理するのかでもいいんですが、そういったことをお聞かせ願えればと思います。言葉をひらいていうと、たとえば行動とか応援にかかわる行動だけなのか、それとも幅広い学生生活みたいなものについても何か言っていたりなのか、一人一人の中身というんですかね。応援することについて考えとかそう言ったものについても指導とかいうのがあるのかというところをお聞かせいただければと思います。
指導するのはオウカンが前に立って活動する時とか、全校で集まって集会を開く時などの場の整理をしますね。中味については朝練とか応援練習中とかは指導したりしますけど。基本できてれば

いいので、まそこですかね。

　ありがとうございました。横尾先生いろいろ実践の立場からもいろんな応援団をご覧になってきていると思いますが、実際みていただいた感想なのを。
松本深志高校の皆さん非常に、実演ですか、力強くて選手も鼓舞できるんじゃないかな。関東の方であまり観られないスタイルですごく興味深く拝見させていただきました。お訊きしたいのが、ＨＰを拝見させていただいたら非常に伝統のある歴史のある学校であるとお見受けしたんですけれども、おそらくこういうことはこうだと決まっているものは非常に多くあると思うんですね。たとえば恰好であるとか、やり方であるとか、発声方法とか。その中で言っても皆さん青春真っ盛りですから、これっておかしいんじゃないかとか、これってこういうふうにやった方がいいんじゃないかとかと思うことはあったかどうか。もしあればお聞かせ下さい。
　ずっと続いてきたものなので、時代によって変えていかなければいけない部分も多くあって、そういう部分は夏から春にかけての間にミーティングを開いて話し合って最近かわった応援は、野球の応援に行く際に、先ほど実演したもの以外にも部からの希望もあり、他の学校もやるような今風の歌というかそいうのを１回か２回取り入れたりとか、かえるべきことはそういうふうにきめています。
　卒業生や先輩に「何やってるんだ」みたいに言われたことありますか？
言う方はいますけど、オウカンを作っていくのはわたしたちなので、そのひとたちは関係ないと思いますし、先輩、引退されたかたがたは、私たちのことを信頼し、最終的にはあたらしくなって興味深く応援してくれている感じです。
なるほどありがとうございました。

　山田さん質問かなければ感想を応援団経験者として年代も近いので感想をお願いします。
先程の実演みさせていただいて、同じ、違うんですけれど応援団をやってきたものとしては大変な練習をしているなと非常に思いました。動きのひとつひとつからあっていたので、これはそうとうな練習をしてるんだなとおもったんですが、ひとつおききしたいのが、まあそういった、多分この場だと華やかなんですけど、練習ではちょっと違う。そこずれてる。そこいれてない。みたいなことがあったと思うんですけど、そのへんの指導のこつとかは深志高校の皆さんはどういった感じでやられていたんでしょうか
　練習はさきほどのやつはとおしでみて、まず上から下にむけていって時間とったりして、同じ横同士でも注意しあったりして改善していくというふうに練習をしています。
ありがとうございました。いろいろ興味深い話ですね

　それでは瀬戸先生のほうにマイクもどしてもらいまして、松本の応援団の皆さんもそうなんですけど、他の講師のみなさんの発表を通していければと議論を深めていければと　思いますので、何かありましたらお願いします。非常に興味深いですが、時間もせまっているので困っています。わたし自身はいろんなところで応援団を見てきて、松本深志高校で応援団の形態で応援してるところって、まだまだ日本にいくつもあって、やりかたもすごく共通しているところがあって、明治の時代から受け継がれている応援団のスタイルをきちっと守っていらっしゃる。稀有な例で重要だなと僕は個人的に思っています。
　折角なんで伺いたいんですが、ご自身たちがやっている応援のスタイルみたいなものというのが

世の中でいろんなところにあるか、他のところと繋がるとかなんかそういう感じで、知識を増やしたりとか、コミニュケーションとったりとかそういうこと応援団の中ではありますか？むしろ自分たちがやっている世界がひとつで、それ以外は外とはつながってない感じですかねちょっと教えていただきたい。
　わたしたちは個性ある深志の応援を大切にしているので、他とはまったくないです。
ありがとうございました。

堤先生おねがいします。
　ハイ。質問としては２点あります。まず１点目は深志高校の応管の方に今の応援団管理委員会の中で松本深志高校の中でと言えばいいのか、松本中学といえばいいのかわからないですが、応援団の歴史がどういうふうに語られているのか、あるいは語られていないのか。なければいいのですが、学校の中でといいますか、応援を管理して指導していく中でどういう風に言われているのか伺いたい。２つ目は横尾先生にというのもあるのですが、今回応援団の話をいただいてから東大の応援部の関係者になにか東大応援部の歴史について知っていることはないか聞いてみたのですが、戦後の話ばかりで戦前の話はまったくないと。推論で説明はできると思いますが、横尾先生の話のなかでみせる動きというのがあって、そのひとつひとつに意味をこめて表現していく話がありました。学校の頭文字を表現するなどがわかりやすいのですが、歴史とか伝統とかそういうものを含めてなにか表現したり、あるいは理解するといった時にはいろいろ形があるのかなと思っています。実際やっていくなかで、学校の歴史とか伝統をどうやって表現していくのかをお伺いできればと思っております。
　オウカンの歴史がかたりつがれているかについては、わたしたちはあまり説明を受けていなくて、でも部室にはいたるところに資料とかがのこっていてそれをみると、なかなかわかってくるところはあってそれではいけないと思っていて変えていかなきゃと思ってます。
　オウカンの歴史は毎年調べて自分達でみつけていくんですが、ふかしのオウカンを作ったのは岡田ハジメ校長で、もともと深志にあった応援団を管理委員会にして全校応援団にした。それでお互いを鼓舞しあって高めあっていこうとつくられたのが、岡田ハジメ校長です。オウカンの伝統とかオウカンやってるみんな知っています。
　ありがとうございます。横尾先生いま堤先生からふられたと思うんですが、じつは応援団管理委員会のおふたりが今日は合宿で走って駆け付けてもらって分刻みで合宿所までもどらなきゃいけないらしく、横尾先生堤先生のお答えにあわせてなにか質問があればおふたりあればあわせてお願いします。
　はいもうおなかいっぱいです。大丈夫です。

　堤先生のお答えいただければと思います。

　伝統をどのように表現するかということですが、積極的に表現しようと思うと活動する必要はないと思うんですよね。その応援団、なんとか学校応援団は学校といっている以上学校そのものを応援しなきゃいけない、学校そのものを応援するにはどうすればいいか学校が求めるような生徒像を体現することだと思うんですよ。なので学校の歴史であるとか校則とかきまりごとを１番知っていなきゃいけないのは応援団員だと思いますし、いろんな動きをするのであればそれは結局その学校にまつわるものでなかったら、なんとか学校応援団の名前を冠している意味がなくなってしまうと

思うんですよね。聞かれたときにちゃんとこたえられるとか、意味があってやっているんだぞと理解しているかどうかということが大事じゃないかと思うんです。以上です。

ハイ。ありがとうございます。そろそろお帰りいただこうと思うんですが、瀬戸先生、最後にご質問あれば折角ですので、ハイ。
質問はないですけど、すごくすてきな実演を拝見してどうもありがとうございました。で、すごく練習とか大変な時もあると思いますし、それからあと実際にやっていて自分達が、今の時代とすこし違う部分もあってなかなか理解できない時もあったりするかもしれませんけども、多分こちらのフロアにいる皆さんは分かると思うんですが、そこでがんばったことは後で自分を支えてくれたりとか、まちがいなく今深志に在籍している時よりもあなた達が卒業された後に、自分の誇りになったり支えてくれる自分の中心になったり、それから多分いま一緒にいる人たちは、他の部活よりももっとバインドが強くて、多分仲間になっていって、友達じゃなくて喧嘩するとかしないとかじゃなくてそういうレベルじゃない付き合いをずっとしていると思うんですよ。
そうした時に自分を自分より知っているような仲間ができるような組織として応援団の枠組みというのはみんなさんをすごく大切にしてくれる枠組みになっていくと思うので、ぼくは応援団を応援する人間でいたいと思っているんで、これから多分ダッシュで行くんですよね。そういうのも含めて、たまになにやっているんだろうとなるかもしれませんが、自分達のやっていることを信じてがんばっていっていただければ僕なんかはうれしいなと思っているし、先輩方も応援してると思うんで、深志の伝統の一部じゃなくて体現者だと思いますんで、松本中学からの系譜をそんなに重く背負うつもりはないんですけど結果的にあなた達が次のバトンを誰かに渡せるまでがんばっていただければステキだと思っています。

お二人最後に一言今後の意気ごみのようなものを語っていただければいかがでしょうか？
やっぱり続いてきた伝統をよりよいものに変えつつ次の世代に交代していけるようできることを一生懸命やって駆けぬけたいと思います。
私達オウカンはこのまえ８月くらい引き継いだばかりで新体制なので、ほんとに１年間というものはあっという間なので、１年にして悔いの残らないよう失敗して後輩に残せるようにどんどんチャレンジしていきたいなあと思っています。

ありがとうございます。
時間になりましたので、お二人にはお帰りいただくということで今一度盛大な拍手をよろしくお願いいたします。

松本深志高校応援団管理委員会の皆さんどうもありがとうございました。実際に実演をみさせていただくとかなり貴重な機会でしたので、議論の土台にもなったかなと思っております。ここで檀上での討論が２０分間終了いたしましたので、フロアの皆さん合わせて会場の皆さんとしていきたいなと思っています。まず会場の方で質問やご意見ある方挙手の方をお願い致します。
お話をいただく際に可能であれば所属・お名前等いただければと思います。

長野市　７９歳　増田であります。
６０年前母校の応援団員でありました。質問、意見ではなく感想でございますが、瀬戸先生のお

話の中に応援団文化という概念ひとつのくくりがありました。昨年民族博物館の定期的刊行物で４月１日付けのやつで「やじと喝采」と題した本がありまして、わたしがはじめて読んだときに応援団について「応援文化序論」ということをかいてあり非常に興味深く読みました。さらに横尾先生の話の中に静岡県では応援フェスティバルというのがきちんとやっていると、つまり静岡県には応援文化があるんだなということが知ることができました。６０年前の話でございますが、単なる伝統ではなくて、応援あるいはそれを組織化した応援団が文化として日本が世界に誇ってもいいものではないかと勝手に思っていますが、ほんとうに６０年ぶりにあたらしい血が燃え上がってきたことに感謝いたします。ありがとうございます。

ありがとうございました。

国立民族歴史博物館の件について文化的に文化人類学の点から応援団をとりあげる活動についてはですね。じつは瀬戸先生もすこし関わっておられるというお話だったと思うんですが、そちらになにかお話あればお願いいたします。

ご意見ありがとうございます。国立民族歴史博物館で毎月出してる刊行物「やじ」の話もあります。今年の４月のものは実は体育会文化で体育会について考える文化人類学的に例えば学校という枠組みの中で特に応援だったり体育だったり、そういうものが営みとしてどういう役割を機能とかもてるかということを注目されはじめていると、すなわちどういうことかというと多分日本独自の文化のきりくちとしてもたえうる対象ではないかなということ。世の中が明治以降ずっと中央集権化の中で均一な世界がつくられて均一な生産物ができ、すなわち合理的、効率性高いものになっていく部分と別に地域、地域でもっている文化みたいなものが学校の枠組みのなかで出来ることじたいが、実は伝統的な枠組みで見た時に特別な価値みたいなものみんながオリジナリティーを持っているんじゃないかなということに多分気が付き始めた。

そういう意味では旧制高校とか中学とかがもっている、いまはあまりないですけど寮とか歌ですね校歌、応援歌それから応援団、体育会とか、それから文化祭、体育祭いろんなものに夢中になって、特別なことだと自校体操ですね。そういったものもふくめて、みんながその大切さに気が付きはじめてくれたのかなという気がしていて、わたしはうれしい部分なんですけど、高校の応援団フェスティバルでいえば静岡もそうですし富山であるとか香川県であるとか埼玉県であるとかそういったところで盛んに行なわれるようになってきまして、つまり行政が主体になってそういったものを守っていくべきなんじゃないか　意味とか価値があるんじゃないかということも、昨今みられますので、そういった枠組みのなかでなぜそういうことがあるか、やはり文化として守るべきだからなんらかの形で守ろうということに全体として気が付きはじめたのかなと、それに気が付くまえにずーと旧制中学の系譜でそれをまもってきた深志だとか縣が丘だとかとういうのはやっぱりすごいなとぼくはずっと思ってたりするのでそういった意味ではみんなでどうにかまもっていけたらなというふうにも思っております。ありがとうございます。

はい。ありがとうございました。他に何かご質問のあるかたいらっしゃいますか。お願いします。

本日は貴重な機会をありがとうございます。東京都の板橋区にあります。城北学園中学・高等学校の一貫校です。先ほど横尾先生のお話の中でも紹介をしていただきました城北学園で応援部の顧問を務めております仁科と申します。よろしくお願いいたします。ほんとに先生方貴重なお話をあ

りがとうございました。私自身がですね、静岡県これも先ほどから話題になりましたが、静岡県立静岡東高等学校というところで、応援団リーダー部に所属しておりましたので、なんとなく自分自身の経験で応援団ってこういうものだとか、あるいは今指導者として、なんとなくこういう風にやっていこうと考えている。とようなところが、今日先生方のお話を伺ってですね、ちょっとみえてきたかなというふうに思っております。ありがとうございました。

で、２つお尋ねしたいことがあるのですが、主に瀬戸先生のお話のところの内容と関わってくると思いますが、利害の利というお言葉で説明して下さいました。合理的ではないその外側の部分に日本的な利・ことわりがあるということでしたが、そういったものについて今後できるだけ合理的説明をしていくことが、応援団の未来に必要だと考えたらいいのか、それとも利害の利であるのだということをむしろ前面に押し出して、それこそ日本の文化であるとか、旧制中学は旧制高校の時代から脈々と受け継がれているものなんだというような独特のものとしてこのまま引きついで行くという事の方がいいと考えるのか、このあたりのところを先生方にまず１つお尋ねしたいと思います。

もうひとつはやはりこれも瀬戸先生のお話のなかで黒子としてのアイデンティティのお話がありました。先生のお話のなかでは、運動部との比較で勝利を目的にするのではないというところで言葉をお使いになっていたと思いますが、よく応援団を表す言葉として黒子とか、縁の下の力持ちという言葉が使われます。いくつかの応援団の行事窓では日頃、日の目を見る事のない生徒たちが今日は主役になるというような言い方をされますが、私自身はその言い方に非常に強い違和感を持っておりまして自分自身の経験から言っても、今指導している生徒たちに対しても決して運動部のためにやっているとか、だれかのためにやっている。それは確かにそうなんですが、われわれの応援活動というのが、縁の下であって、スポットライト浴びていない活動であるというふうには考えてほしくないなあと思っております。野球のスタンドで動いている時はですね、もちろん野球部のために応援している訳なんですけど、スタンドを作り上げているのは私たちだと教示のようなもの誇りのようなものが応援のリーダーにはあるんじゃないかなと思います。そのあとに深志の生徒さんに伺ってみたいと思ったんですが、今日聞いてみてあんまり卑屈さみたいなのは、多分彼女達ももってないのかなと思いました。瀬戸先生などは全国各地を応援団みてらっしゃるとのことですので、そういった観点で先生がご覧になって応援団と言うものをどのようにお感じになるのか。その、必ずしも応援団というのが、影の存在ではないとお考えなのか、まっ。そのあたりを伺えたらと思います。長いこと申しまして申し訳ないですが２つお尋ねしたいと思います。よろしくお願いします。

瀬戸先生２点お願いいたします。

１点目なんですけども、ただその２つは共存できると思っていて、つまり現在の教育の枠組みの中で現代社会を生きている子供達になにかを伝える場合には合理的だったり効率的だったり、かれらが理解できる姿・形で我々が伝えるという必要があってそのツールというのが合理性、効率性がなきゃいかん。というのは間違いないと思います。伝えないと言うんだったらあれやれと言えばいいんですけど、そうじゃなくて伝えるという意味でそれがひとつあって、ただ一方で、おとといですが、大阪で体育学会というところで応援団の別の発表してきたんですけど外国人たち留学生がすごく応援に興味思って応援団にはいる例が大学でけっこう今あってですね。その際にかれらはジャパノロジー的な日本学を研究する意味で応援団がおもしろいとか、あと政府では２０００年くらいからクールジャパンと言って日本を盛んに日本的なコンテンツを売り出すと。そのなかには応援団

はないんですけども、一方でかれらからしてみれば、これもクールだとジャパンクールなんだと考えている部分もあるようで。すなわちどういうことかと言うと伝統的とはいえないかもしれないが、昔から江戸期より前から伝わっているものではないけども、かれらからしてみれば正に日本的な枠組みとして存在していると。つまりそれにはいるということは、グローバルゼーションとして、みんなに共有している枠組みにしていくのではなくて、日本的であればあるからこそ、かれらにとって興味があるという事になりうる。そうするとジャパナイゼーションとかジャパンゼーションという言い方でいえるんですが、つまり大相撲といっしょで外国の人がきてもいいけど、うちのやり方は変えないよ。だから大相撲はおもしろい。ようなそういう枠組みの中に修練させるとするならば、すなわち利害の利といった西洋の合理性じゃないコトワリがここにあってそれが実にあなた達にとって、我々にとっておもしろいからそれを守るべき、それをどのようにしたら守れるか。位置づけになると思うんですね。それを合理的に伝えることは可能。伝える側教える側がどれぐらいそれを理解してどういう位置づけで伝えられるか。昔からきているものをどういう風に位置付けて論理的にお伝えするならばお伝えする価値がわれわれの利のそとにあるけれどもそれは我々が忘れてしまった日本の利かもしれない。日本文化なのかもしれないということを伝えるためにわれわれが知識をふやす必要があるのかもしれない。

もう１点は黒子に関していえば、まさにおっしゃるとおりだと思うんですが、そこには応援団の先輩達にお話を聞くと、例えば６大学の６旗のもとにという集まりをされていて、日比谷公会堂では今年はなくなってしまいましたが、自分達のデモンストレーションみせる場所がある。でその時に「自分達のやっていることを人にみせるんじゃないんだよな」という演説を聞いたりする。「目立つんじゃないんだよ」と言う先輩達がいて。それはどういうことかというとスタンドを守っている僕らがここでしっかり応援しているんだと自負とか誇りとかがそこにあると思うんですが、じぶんたちがこのパフォーマーとしてひとにみられるために一生けん命やるとかそういう枠組みでは多分ないと思う。だから縁の下とか絶対みえなくて、黒子として絶対そとにでなくて、自分たちがいるかいないかわからないとか、そういうことではなく、ただ人のために、誰かのために、そしてそれが自分のためになる。

結果的に自分がそこにいる存在感であるとか、自負とか誇りとか伝統とかを受け継いで、やっぱり応援団てすごいよねといわれるような存在感というのは継承されるべきなのかなあと思いますので、だから多分言っている意味はいっしょだと思うんですけど、明治とかだと円陣おいとかエンジンのオイルだと。でもそれがないとまわらないだろう。ということに誇りをもつみたいな、そんな感覚というのが多分応援団の誇りとか美徳とか価値なのかなと、わたし自身は思っています。

はいすみません。ありがとうございました。

討論のほうも時間がありますので、あと３名程度もしあればお引き受けしようかと　思いますが、このあと懇親会出席される方は懇親会で深くご議論されるのもよろしいんですが、折角３名のかたおそろいでこういう機会もなかなかないと思いますので、是非簡単な質問でもかまいませんのでもしあれば挙手をおねがいします。ではこちらのかたからまず。このあとさいごに挙手をつのりましてこちらで１度しめきりとさせていただきますので、もし質問があるかたはあらかじめ考えていただければと思います。ではよろしくお願いします。

今松本深志高校に所属してまして、この夏までオウカンにはいっていたＯＢですね。名前は前田

なんですが、さきほどのはなしで関東にみられない地域差みたいなのがあるとおっしゃっていたんですが、いくつかたくさん応援団をみてきたんだとおもわれるんですけど、応援団の地域差を感じたことがあればどんな差があるか教えていただきたい。

横尾先生よろしくお願いします。瀬戸先生もありましたら、堤先生も諏訪清涼であるとか他にいろいろ研究されていますので、なければ大丈夫ですが、では横尾先生おねがいします。

パっと見てああいう形で野球応援されていることも考えると、楽器、笛であるとか、ホラガイみたいなものも持っていました。それからノボリ、「大和魂」。それから高いゲタ。大学応援団では高下駄はいているところあるんですが、地域差というか置かれた環境の違いだと思います。東京都の高校野球の予選会都大会ですね鳴り物禁止なんですよね。和太鼓はもちろん大太鼓も叩いてはいけない。から、声援でやるしかない。球場によってはメガホンも使用禁止。声を合わせるのもだめ。じゃ何ならいいんだ、というのがあるんで、マンションとか近くにあると思うんで、限られた環境のなかで試行錯誤してできてきた結果、今のかたちがある。と考えると（その応援方法を）やるしかないというのを感じましたね。あの形で野球応援されているんですよね。「うるさい」とか（苦情への対策は）大丈夫なんですか。

（会場内からの発言がありましたが、聞き取れませんでした。）
応援する現場が何がゆるされていて、何がだめなのかと、後はどうゆう場所で応援が（ニーズ）あるのか。地域の寒暖の差だとかもひょっとしたらあるのかなと。よろしいでしょうか。
文化研究者からいうと多分深志高校でやっているスタイルはいわゆる往時というか伝統的に昔やっていたスタイルとかで、例えば今日でてきた盛岡一高とか仙台一高とかその各地域の名門と言われる学校にバンカラ文化として系譜が残っているところは多分けっこうあると思うんです。そうゆうところの特徴としてボロらん（ぼろぼろのがくらん）をわざとぼろぼろにしたりのを含めて装備もこちらで使っているようなホラガイとか、ももたろう旗といわれるものもでてきたり、マントだったり、高下駄だったり同じような装備を使って応援する場所が残っていて、多分東京もそうだったと思うんです。だけど中央はどんどん更新されていくんですよね。新しく更新されるんです。そうすると更新されていくとそこに昔のものが残りづらくて、東京とか大阪ではない地域で伝統文化が息づくような文化度が高いところで、名門校と言われるところがあった場合に淘汰されずに昔の純粋の枠組みみたいなもの守りやすい。という環境が残っているところがあるとすれば、残っている場所がいくつかあってそれが多分松本だと思うんです。文化度が高くてと、教育長が話してましたので、だから明治時代とか大正時代の文化というものが生き残っている。残存していた場所だと思います。北大とかもそうですよね。先ほどみましたね。ボロボロの着ていたり、あれが普通なんです。彼等にしてみればというのはある。もちろん誇り思って深志がそれを守っている昔の文化なんです。それはひょっとしたら明治期にみんなが共有していた文化。最先端の文化が今文化財として残っているのかという視点もあるかなと思っています。

はい。ありがとうございます。最後の質問を受け付けようと思います。
静岡商業応援団の静岡応援団フェスティバル実行委員会の草島（くさじま）と言います。
瀬戸先生から返事の半分ほどいただいたんですが、昨年応援団フェスティバルも５回目を迎えたんですけど、毎年全国から２０校弱くらい応援団フェスティバルに参加しています。残念なことに２

０校近くがほとんど同じような応援スタイルになってきているのが現状なんです。その点につきまして横尾先生に聞こうかなと思いました。すみませんお願いします。

６大学のチャンスパターンですよね。私が思うのは各校がオリジナルでやるべきだと思います。そこまで至るまで時間がかかる。もっと言うとわたしが大学生だった時は、自分の学校のオリジナルに誇りを感じていたんですけど、ゼロから立ち上げるとなると結局今の中学生、高校生とか、まず、応援団に興味持たせるとなると、いかんせん６大学になってしまう。分かりやすいんですよね。なので、その流れでいろんな学校に伝播してるんじゃないかと思います。現状として私は容認とかの偉そう（な立場）ではないんですが、どの学校もいわゆる６大学のチャンスパターンやるのはしょうがないのかなと。応援団人口が減るよりも、やってくれるんだったらそれでありがたい。と思うんですが、生徒が自ら自分の学校の曲として作ろう、教員からというより生徒から醸成されていくのが、一番いいんじゃないかなと感じています。以上です。

よろしいでしょうか。ハイ。
一番奥のかたお願いします。（挙手の順）
上智大学２年で応援団所属の深沢と申します。今上智大学の応援団の人が増えてもりあがっているんですけど、数年前からリーダー部のほうから人数１人とか２人になってしまって廃部の危機に瀕していんですけど、いま団長のほうから現代の学生に受け入れられる応援をしようと思ってやっているんですけどもそういった求心的な、現代的な学生にうけられる応援をしようとすると、いままでの応援団の伝統をくずしてしまうような矛盾が生じてしまうんですが、そのあたりを先生がたに伺いたいのですが。お願いします。

横尾先生いかでしょうか。
新しい学生を得るためにそれこそ分かりやすい新しい応援方法を前面に出していくことについてということですよね。
ハイ、そういうことです。
上智大学応援団さんは僕が現役のときいろいろお世話になりました。同じ連盟なので、僕は「おおソフィア」という歌好きですよ。僕がいた時チアはいっぱいいたんで、見てて華やかだなあと思っていました。大学の枠組みで言った場合、他の大学の曲を使うのは、僕は間違っていると思いますね。大学の曲を高校が使うのはまだいいと思うんです。進学していった卒業生が、その大学にいるとか説明がつきますし、指導を受けたことになりますけど。同じ大学になると対抗戦になった時に、その大学のオリジナル曲を他の大学が使っているとなると、その時点で負けですから。分かりやすく新しいものを導入するんだったら、オリジナルであるべきだと思うんですけど、不易流行、取捨選択は絶対ありますし、僕個人的に上智大学さんには最先端であってほしい。もっとおしゃれであってもいいと思うし、別に応援団だからといってゴリゴリの旧態然としている必要はないと思うんですよ。国学とか。（おしゃれな活動）上智とか青学さんの役割じゃないかと思うので、多分いろんな OB の方とか周りの方の反応があると思いますけど、そこの意味とか建学の精神とか上智さんの場合あると思うので、そこらを踏まえたうえで残すものは残す、無くすものは無くす。新らしいもの取り入れるなら取り入れる。僕は非常にいいことだと思います。

ハイ、ありがとうございます。他の先生何か一言あれば如何でしょうか。

よろしいですか。
リーダーの資質だと思います。つまり先頭にたっている人間が何を見てるかということによって、取捨選択が決まるんで、それが残すべきもの、残さなくていいものというのは、過去も見えているし、将来もみえている人間が、ひっぱれるかという。それは組織論で、どこでも一緒なんですけども、その時にリーダー部という、そのガクランを着た人達がそれを議論できるような空間があって、それをどれを残そうかうまく話ができているとするならば変えてもいいと思うんですよね。ただよくわからないまま変えてしまうと、１回なくしたものは戻ってこない。だから伝統と言われてもよくわからないとか、面倒くさいからこれ止めようよみたいなことはよくあることですけども。
特に生命線として応援団て古臭いと言われる枠組みの中だからこそ生きている皆さんそこは思っているとおもう。まず、そこをしっかり理解したうえで確たるものは、わかんないとどんどん合理的な方にいって結局「学ランなんて着なくていいすよね」「着なくていいよ」な「そんな声はらなくてもいいじゃないですか」「いいよな」という時に「おれらいるんすか」「確かにいらないなっ」と言うことになってしまった時でも、戻れないことは事実です。何が楽しいか、何が素敵かの前に、何が大切でこれが残っているか。何が生命線なのかということを考えたほうがいいかなと思います。
ハイ。ありがとうございました。

では１番先頭のかたこちらよろしいでしょうか。あともうひとり
この質問で最後にしたいと思います。お願いします。
静岡の藤岡明星高校の望月と申します。静岡県は特殊でして、１回戦から野球の応援にブラスバンドの生徒つれていくというようなことが、ずーと続いております。野球に参加するのは１１４校だから１１４校の応援団が存在します。
どういうことかというと、いやいや応援団になってしまう子がいるんですね。
応援プロパー。わたしが高校の時応援団だったので、黒子の話もよく分かるんですけど、その意味すら大変な思いしている生徒とか、指導者がいて。そんな現状があったものですから、去年から応援連絡協議会を作って、先生方に聞くと、だいたい悩みは同じなんですね。ここ１０年くらい高野連からの圧力が強くなって、あれやるな。これやるな。の話で、さっきの深志さんを観てて、静岡だったらのぼり旗絶対だめだし、ホラガイだめだし、チアホーンだめだしということで、全部だめだしくらってしまうんですね。質問ではなくて皆さんにお願いなんですが、日本各地で話があった時に横の連携を保っていかないと、現場現場で、さっき深志さんと考えてることだいたい同じなんで、横の価値観共有していかないと。僕は応援団は日本の文化だと思っているので、もうちょっと誇り思って黒子に。僕らのころはここだと言って意味がわかったのは３０年、４０年たってこういう意味だったんだなと、それが美徳。日本人の多くは語らないので、それが美しさでもあったんですけど、最近はそれを語ってあげないとわからないという生徒がそうですし、教員もなんで応援団やるんだというので、明文化していかないといけない。ルールづくりとワードづくりがキーワードだと思ってますので、是非行っ先々で我々の子とも静岡県のことも話していただいて、横のつながりをつくるように、ぜひ奨励をしていただきたいと思います。ありがとうございました。

ハイ。ありがとうございます。今回のシンポジウムもそうですけど、応援団を改めて振り返ると
非常に学校とか学生に対して、影響が強く、いろんなことが考えられると思います。横尾先生も
かなり横のつながりの点ではかなり活動されているので、もしお話があればお願いいたします。
横のつながりを強めるための活動ということですか。具体的な話ですと２，３年まえくらいに東京

と神奈川の応援団があるとおもわれる学校に手紙をおくって、応援団というのは意味があると思うので、みんなで情報共有しましょうと、４０通くらい送って２通くらいしかかえって来なくて、難しいなと思った中で静岡県のイベントだとか埼玉の埼玉学校という昔から「がちっ」としたのがあるんですが、静岡県の話を聞いた時にすごくうらやましいなと思って、こないだ参加させてもらった。そういう経緯なので、ああいう形のやりかたを高校で応援団が集まってなにかひとつのものを作るというのをいろんな各県に波及させていくためにはどうすればいいかということを今考えている段階で、具体的にじゃ何をしてるかと言うと、静岡県さんにオンブにダッコの現状です。はい。以上です。

はい、ありがとうございます。われわれ世話人も今回応援団の横尾先生を呼ぶ際に、当初文化的な側面とか歴史的側面から振り返ろうという話だったんですが、教育現場で応援団を、教育的な意義から見つめ直そうと言う、かなり今まで我々がもっていない視点を応援団に関与されている先生を今回見つけまして、そう言うの考えると高野連の皆さんも応援団がどれだけ教育的意義思っているかというのが、これからだんだん見直されてくるのかと言うのが今日の発表を聞いていて思いました。はい。最後にご質問よろしくお願いいたします。

挙手をお願いします。

明治学園大学の田中と申します。今日のテーマと関わり応援団の歴史と現代というところで、最初うかがって、応援団というのは男の文化であった、長く文化があったと思うんですね。最近男女混合のそう言った例がだんだん増えて気になったところをお聞きしようと、先ほど深志のみなさんを目の当たりにして、いろいろ最近はどうなのかなと思っていたところ、感じもするんですが、そもそも伺いたいということは最近フジテレビのドキュメンタリーノンフィクション番組があって数年にわたって明治大学付属明治高校の部が縮小して共学化してチアリーダー部が女性の部活としてできる応援団長に女性を選出する時がきた。抵抗があって流れがあっていまおちついている。何年もかかっている歴史があったんですね。その前にはチアリーダー部が普段はチアリーダーとして、ただ団長というときだけ学ランを着る。共学のなかで男女混合の応援団のすがたになっている応援団文化の大切なところは歴史的にみると共学化する男女いっしょでいろんな議論があったと思うんですね。堤先生の発表にもあった応援とか声援は男性も女性も使いますけども、応援団の文化の中でみると男性の親和性に近い応援のほうが、この質問は控えることとして、最後に伺いたいのは歴史と現代では男女の混合の最近増えて現在のすがたを深めたいと思い質問させていただきます。

ありがとうございます。いかがでしょうか。

瀬戸先生いかでしょうか。

当然のように男社会。女性がそこにいることは想定されてない。それはくべつでも差別ではなくて、すみわけだったと思います。社会の中におけるセクシャルジーではなくジェンダー論で言えば、日本社会のなかで女性がいるところがあって、男性がいるところがあって、例えば男しかいない相撲部に女性が入ってきたらびっくりするレベルの話だったのかも知れない。だから当時から言えば、想定の外にあった話なのかなと。考えると自然なのかなと、ただ一方で今の社会が近づけばその想定というのが、ゆるやかになってきたり、違うレベルでさまざまな意見がでたりとか１９８４年男女雇用均等法ができたりとかそこに女性が進出することに前提の価値というものが、知らない内に消えていたというのもあるのかなと思います。ただ当時そこにいた先輩たちからすれば当時のまま

止まっていますから。早稲田の女性リーダーが入ってきた時にどうしたらいいんだとか。中央大学も先日まで女性団長でしたし、明大、明治もこの間２代目の女性団長が引退されたみたいな状態。それからあと他の高校とかにおいても女性のリーダーの方が多いという場合も多々ございますので、ひょっとしたらジェンダー論としては面白くない部分にもなりつつあるのかもしれないぐらい、あたりまえのことになりつつ、ただひとつ面白いと私が思っているのは、そこで彼女達がやろうとしていることとは女性が進出したからって女性的にやろうとかということではなく、男性の役回りをやろうと、つまりそこの仕掛け自体を変えようとしてないという事だと思います。多分深志の生徒さんもそうだったと思うですが、そういう意味ではそこに切り口。いまそれ僕もやっているんですけど自分の研究として、つまりいまのジェンダー論を超えたところで、新しく彼女達がいる位置というのがおもしろいなと僕なんか、今したためているんです。そういう意味ではジェンダー論としてはおもしろいと思っております。

　ありがとうございます。いま話をうかがって先程の横尾先生の話にあった、伝統というのが、いつのまにか変わったうえで、それが長くからの伝統になっている場合もあるというお話があって、それでジェンダーのような、かかわるところもあるのかなと思いますし、さきほど深志の生徒さんがいた時に、こういうことを伺ってみたいなと思いつつ、ただ彼女達の様子を見てると、なにか古い枠組みをなげかけているので聞きにくい雰囲気もありましたので今のお話大変ありがたく思います。ありがとうございます。

はい。ありがとうございました。ではそろそろお時間になりましたので、こちらでシンポジウムの討論は終わりたいと思います。講師の皆さんありがとうございました。
（拍手）
　今回はセミナーの方で応援団という今まで注目されることがなかなかこう学術的に振り返ることがなかった応援団を取り上げまして、瀬戸先生の方から文化的な非常に重要な機能思っていると、歴史的にもかなり長く明治から続いているということと､横尾先生の方から教育的意義という形で、ほんとにいろいろな角度から、いままで黒子ではないですけど、影のところにいた人達にいろんな人が懐中電灯で光を当ててなんか姿を現してきたようなそんなようなシンポジウムだったと思います。ぜひこのシンポジウムをきっかけに応援団というものを改めて考えるきっかけにしていただくことですね、新らしく横のつながりも大事だということのお話もありましたが、是非この後も懇親会参加される方はお話等されていただければと思いますが、その間に名刺交換を是非していただいて、今後のつながりを深めていただければと思いますのでこちらの方で終了させていただきます。記念館の夏期教育セミナーこのような形でいろいろな形で、セミナーを開催しておりますので、ぜひ来年度以降も足を運んでいただければありがたいと思います。このあと記念館のほうから今後の動きについて話がありますので講師の皆さんと会場にお越しの皆さん。今回ほんとにお忙しい中ありがとうございました。

　皆様、本日は誠にありがとうございました。ここで、明日のプログラムのご案内をさせていただきます。第２１回夏期教育セミナーの資料をご覧下さい。一番最後のページに、明日のプログラムを掲載しております。まず研究者の皆様それぞれのテーマでお話いただく研究発表会、旧制高等学校記念館の見学会、旧制高等学校研究情報交換会と続きます。昼食の注文は締切ましたが、資料代５００円をお支払いいただければ研究発表会も今から参加可能ですので、ご興味のある方はお近く

の職員にお声かけ下さい。それでは、このあと隣の第１会議室で懇親会がございますので、お申込みをされているかたは準備ができ次第お集まり次第始めたいと思います。